埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第225集

大里郡寄居町

折原石道遺跡

県道広木折原線関係埋蔵文化財発掘調査報告

－Ⅵ－

1999

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第１号住居跡出土土器

土器焼成関連遺構出土土器

序

関東地方の中央部の位置を占める埼玉県は、首都東京に集中した行政・教育・情報などの諸機能の一翼を担い、新たな時代の到来に対応すべく「環境優先」、「生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりをめざした施策を行っております。

高度成長期以降のわが県は東京近郊の住宅適地となり、県南部を中心に人口が急増し、ここから、住宅・教育・産業・交通など多くの行政需要が生じました。特に、本格的な「車社会」に転換した現代においては、交通対策・道路整備が産業振興に限らず県民生活一般に必要不可欠な課題となっております。

埼玉県の新たな長期構想では、快適でうるおいのある生活空間の形成をめざす「地域　いきいき　彩の国」構想の中に、「県内1時間道路網構想」として県内の道路整備が重点施策として取り上げられており、県道を中心とした幹線道路・地域高規格道路等の整備、総合的な交通渋滞対策を推進しています。

美里町から寄居町へ秩父山地東縁部の丘陵地帯を南北方向に走る県道広木折原線の建設は国道140号線にアクセスする道路として「北の回廊」地域の振興のために重要な道路整備の一つとして計画されました。この路線内の寄居町折原地区には、埋蔵文化財包蔵地として貴重な埋蔵文化財の所在が知られており、関係各機関の間でその取扱いについて慎重な協議が重ねられましたが、やむをえず記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

寄居町は、縄文時代の良好な集落跡が市街地周辺で数多く調査されていることで知られていますが、小前田・樋ノ下などの古墳群、奈良・平安時代の末野窯跡群、中世の鉢形城跡など埼玉県の歴史を語る場合には欠かせない重要な遺跡・史跡をかかえております。

今回報告する折原石道遺跡には、平安時代の小さな集落跡ではありますが、末野窯跡群が衰退しつつある時代に須恵器の系譜を引く焼き物を焼く、土器焼成遺構という平地の「窯」を検出し、埼玉の古代窯業生産史に一石を投じる貴重な発見がありました。

本書を埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の啓発普及、参考資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大な御指導・御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路建設課、埼玉県皆野寄居バイパス建設事務所、寄居町教育委員会、並びに、地元関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒井　桂

例　言

1．本書は埼玉県大里郡寄居町に所在する折原石道遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は以下のとおりである。

　折原石道遺跡（ORHRISMT）

　大里郡寄居町大字折原字石道991番地1

　平成8年3月5日付け教文第2－213号

3．発掘調査は、県道広木折原線建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、西井幸雄、大谷徹が担当し、平成9年1月1日から平成9年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は利根川章彦が担当し、平成10年11月1日から平成11年3月31日まで実施した。

5．遺跡の基準点測量・空中写真撮影は株式会社アイシーに、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。

6．発掘調査における写真撮影は、西井、大谷が行い、遺物の写真撮影は岩田明広が行った。

7．出土品の整理および図版の作成は、利根川が行い、真野目洋子の協力を得た。本書の執筆はⅠ－1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外は利根川があたった。

8．本書の編集は、利根川があたった。

9．本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10．本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

今関久夫、石塚三夫、小林　高、寄居町教育委員会

凡　例

1．本書の遺跡全測図におけるX、Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第K系に基づく座標数値を示している。単位はmで表示している。また、各遺構図における方位表示は、すべて座標北を示している。

2．グリッドは10m×10m方眼で設定した。グリッドの名称は方眼の北西隅の杭番号である。

3．遺構の表記記号は次のとおりである。

　ＳＪ…住居跡　ＳＫ…土壙　ＳＤ…溝跡

　ＳＦ…土器焼成遺構　ＳＣ…集石遺構

　Ｐ…柱穴

4．遺構挿図の縮尺は原則として次のとおりである。これ以外のものは挿図のスケールを参照のこと。

　住居跡・土器焼成遺構・土壙・集石遺構1/60

　溝跡1/60・1/120　カマド1/30　柱穴1/60・1/80

　遺物分布図1/30・1/60

5．遺物挿図の縮尺は次のとおりである。

　土器1/4

　土製品・石器・石製品1/3　・1/4

6．遺物観察表の計測値は、（　）内は推定値あるいは残存部の値、単位はcmである。

7．遺物観察表の色調は新版標準土色帳に準じて細別したが、厳密でなく、概ねである。

　A…10R赤、暗赤、赤橙

　B…2.5ＹＲ橙、明赤褐、赤褐、赤褐と５ＹＲ赤褐、橙、明赤褐

　C…7.5ＹＲ黄橙、橙、褐、明褐、浅黄橙と10ＹＲ黄橙、明黄褐、黄褐

　D…2.5Y黄

　E…2.5Yと５Y淡黄

　F…５ＹＲと 7.5ＹＲ黒褐、黒、明褐灰、灰褐

　G…５ＢＧと10ＢＧ明青灰、青灰

　H…N灰白、灰、暗灰

　I…7.5Y灰白、灰

　J…５Y灰白、灰と 2.5Y灰白

　K…５Ｐと５ＲＰ明紫灰、紫灰

8．遺物観察表の胎土は、概ね最も多量に含まれる含有物とその粒度の組み合わせで表記した。含有物の種類は次のとおりである。

　A…赤色粒状　B…白色ないし無色板状

　C…黒色板状　D…白色板状　E…片岩

　F…黒色粒状　G…金色板状　H…白色針状

　含有物の粒度は直径２㎜を粗とし、２㎜以下を細、２㎜以上を礫とする。組み合わせは次のとおりである。

　1…細　2…細＋粗　3…粗　4…粗＋礫

　5…細＋粗＋礫

9．遺物観察表の焼成は次のとおりである。

　A…良好　B…不良

10．柱穴計測表の計測値は、（　）内は推定値あるいは現存部の値で、柱痕径を記述した場合もある。単位はcmである。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 11
Ⅳ　遺構と遺物 …… 14
　1　平安時代 …… 14
　　(1)　竪穴住居跡 …… 14
　　(2)　土器焼成遺構・土器焼成関連遺構 …… 34
　　(3)　土壙 …… 41
　　(4)　その他 …… 47
　2　中・近世 …… 48
　　(1)　土壙 …… 48
　　(2)　溝跡 …… 55
　　(3)　道路状遺構 …… 56
　　(4)　柱穴 …… 60
　　(5)　集石遺構 …… 60
　　(6)　その他 …… 63
Ⅴ　結語 …… 67
　1　折原石道遺跡出土土器の編年的位置 …… 67
　2　土器焼成遺構について …… 84

挿図目次

第１図　埼玉県の地形 …… 4
第２図　周辺の遺跡（１） …… 5
第３図　周辺の遺跡（２） …… 8
第４図　折原石道遺跡の位置と調査区 …… 11
第５図　折原石道遺跡全測図 …… 12
第６図　第１号住居跡 …… 15
第７図　第１号住居跡遺物分布 …… 16
第８図　第１号住居跡出土遺物（１） …… 17
第９図　第１号住居跡出土遺物（２） …… 18
第10図　第１号住居跡出土遺物（３） …… 19
第11図　第１号住居跡出土遺物（４） …… 20
第12図　第２号住居跡 …… 22
第13図　第２号住居跡遺物分布 …… 23
第14図　第２号住居跡出土遺物（１） …… 24
第15図　第２号住居跡出土遺物（２） …… 25
第16図　第３号住居跡 …… 27
第17図　第３号住居跡カマド …… 28
第18図　第３号住居跡遺物分布 …… 28
第19図　第３号住居跡出土遺物（１） …… 29
第20図　第３号住居跡出土遺物（２） …… 30
第21図　第３号住居跡出土遺物（３） …… 31
第22図　第３号住居跡出土遺物（４） …… 32
第23図　第４号住居跡 …… 33
第24図　第１号土器焼成遺構 …… 34
第25図　第１号土器焼成遺構出土遺物 …… 35
第26図　土器焼成関連遺構 …… 36
第27図　土器焼成関連遺構土層断面図 …… 37
第28図　土器焼成関連遺構における土器焼成遺構想定図 …… 38
第29図　土器焼成関連遺構出土遺物（１） …… 39
第30図　土器焼成関連遺構出土遺物（２） …… 40
第31図　土器焼成関連遺構出土遺物（３） …… 42
第32図　古代土壙（１） …… 44
第33図　古代土壙（２） …… 45
第34図　古代土壙出土遺物 …… 47
第35図　その他の古代の出土遺物 …… 48
第36図　中・近世土壙（１） …… 49
第37図　中・近世土壙（２） …… 50
第38図　中・近世土壙（３） …… 51
第39図　溝跡 …… 56
第40図　道路状遺構 …… 58
第41図　柱穴 …… 59
第42図　柱穴断面図 …… 61
第43図　集石遺構 …… 62
第44図　中・近世出土遺物（１） …… 64
第45図　中・近世出土遺物（２） …… 65
第46図　大里郡域の平安時代土器（１） …… 70
第47図　大里郡域の平安時代土器（２） …… 71
第48図　大里郡域の平安時代土器（３） …… 72
第49図　大里郡域の平安時代土器（４） …… 73
第50図　大里郡域の平安時代土器（５） …… 74
第51図　大里郡域の平安時代土器（６） …… 76
第52図　平安時代土器参考資料 …… 77
第53図　大久保山遺跡の奈良・平安時代土器編年 …… 78
第54図　鈴木徳雄氏の「武蔵型甕」・「北武蔵型坏」変遷模式図 …… 79
第55図　中堀遺跡の平安時代土器編年（１） …… 81
第56図　中堀遺跡の平安時代土器編年（２） …… 82
第57図　中堀遺跡の平安時代土器編年（３） …… 83
第58図　土器焼成遺構の事例（１） …… 85
第59図　土器焼成遺構の事例（２） …… 87
第60図　土器焼成遺構の事例（３） …… 89
第61図　土器焼成遺構の事例（４） …… 90

図版目次

図版1　折原石道遺跡全景（南南西の丘陵上から）

図版2　折原石道遺跡全景（航空写真）

図版3　第1号住居跡全景
第1号住居跡カマドA
第1号住居跡カマドB

図版4　第1号住居跡遺物出土状態（上層）
第1号住居跡瓦等出土状態（上層）
第1号住居跡遺物出土状態（下層）

図版5　第1号住居跡カマド近傍遺物出土状態
第1号住居跡羽釜等出土状態
第1号住居跡須恵器坏出土状態

図版6　第2号住居跡全景
第2号住居跡カマドおよび礫出土状態
第2号住居跡カマド

図版7　第3号住居跡全景
第3号住居跡カマド
第4号住居跡全景

図版8　第1号土器焼成遺構全景
土器焼成関連遺構全景
第1～6号土壙分布状況

図版9　第1・2号土壙全景
第3号土壙全景
第4号土壙全景

図版10　第5号土壙全景
第6号土壙全景
N－3，N－4，O－3，O－4グリッド
土壙群・柱穴群

図版11　M－4，N－3，N－4グリッド土壙群・
柱穴群
第7・8・9・25号土壙全景
第7・25号土壙遺物出土状態

図版12　第32～40号土壙近景
第32・33・34号土壙全景
第35・36号土壙全景

図版13　第39～45号土壙近景
第41・42・43・44号土壙全景
第45号土壙全景

図版14　第47・48号土壙，第2号溝跡，第1号集石
遺構下土壙近景
第49・50号土壙全景
第1号溝跡全景

図版15　道路状遺構全景
第1号集石遺構全景
第2・3号集石遺構全景

図版16　第1号住居跡出土遺物(1)

図版17　第1号住居跡出土遺物(2)

図版18　第1号住居跡出土遺物(3)
第2・3号住居跡出土遺物(1)

図版19　第2・3号住居跡出土遺物(2)

図版20　第１号土器焼成遺構出土遺物
土器焼成関連遺構出土遺物(1)

図版21　土器焼成関連遺構出土遺物(2)

図版22　土器焼成関連遺構出土遺物(3)

図版23　第１号住居跡出土丸瓦片
第３号住居跡鉄滓・紡錘車・土錘

図版24　第１号溝跡出土中世遺物
土壙・土器焼成関連遺構出土中世遺物(1)

図版25　土壙・土器焼成関連遺構出土中世遺物(2)

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100㎞の圏内に含まれる。県では快適でうるおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内１時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高規格道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道広木折原線の整備もこうした事業の一つである。

県道広木折原線の建設に先立ち、皆野寄居バイパス建設事務所長から平成８年７月９日付け皆建第260号で、文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地内にあたるため、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成９年１月１日～平成９年３月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条３の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条１項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査届に係わる通知は以下のとおりである。

平成９年３月５日付け　教文第２－213号

（文化財保護課）

2　発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

折原石道遺跡の発掘調査は、平成９年１月１日から平成９年３月15日まで実施した。調査対象区域の面積は2,400㎡であった。県道広木折原線の建設区域には、県道部分とアクセス道路となる町道部分があり、双方とも調査対象区域であったが、試掘調査（第１次調査）によって遺構の所在が確認されなかった町道部分は本調査の対象とはしなかった。また、県道部分のうち、南西側で道路区域ぎりぎりで土器焼成遺構や住居跡が検出された部分については、協議の結果、盛り土工法によって事実上道路の下敷になってしまう範囲に限って拡張することになった。試掘調査とその後の協議を通じて本調査対象区域を見直した結果、調査区は三つに分割されることになった。便宜上北からA区・B区・C区と称しておく。調査以前の地目はA・B区は普通の畑地で、C区は桑畑であった。

１月上旬、調査事務所を設置し、重機による表土除去を開始した。また、調査補助員を召集し、遺構確認作業を開始した。調査は調査区北端部から開始し、南に向って順次進む形で進めた。

調査区は荒川右岸の河岸段丘面であり、地山面は礫まじりの灰褐色粘質土であった。遺構の所在確認はやや困難であったが、焼土・炭化物の分布と遺構覆土と思われる土壌の色調等から判断して確認作業を行った。A区は遺構確認面中に礫が特に顕著で道路状遺構が確認されたのみであった。C区は平坦面から丘陵裾部までトレンチを入れたが、遺構の確認された範囲が限定され、土壙６基の検出にとどまった。よって、この二つの区は迅速に作業が終了した。したがって、調査期間の大半はB区の調査にあてられることになった。住居跡は少なかったが、土器焼成関連遺構や土壙・柱穴がB区南部に密集していた。これらの遺構は、乾燥すると白くなり、カチカチに固まるタイプの、砂礫混りの粘質の土壌により埋まっていたため、掘り下げ作業はたいへん難渋した。遺構の掘り下げ・測量作業の大半が終了した後の３月５日に空中写真撮影を行った。

その後、遺構の写真撮影・測量等の調査工程のうち未了部分を確認し、残った作業を順次進めた。遺構測量図・写真等記録類の整理も進めた。

空中写真撮影前後の３月中旬、調査区の地上での全景写真を撮影し、遺物・記録類の整理・梱包を行った。13日～15日に遺物・記録類・器材搬出、事務所の撤去を行い、調査の全工程を終了した。

整理・報告書刊行

報告書の作成作業は、平成10年11月１日から平成11年３月31日にかけて行い、印刷刊行は３月31日までに行った。

11月上旬から遺物の洗浄・註記を行い、11月中旬には接合・復元を開始した。これと並行して、図面・写真整理もやりやすいところから始めた。

12月上旬には接合・復元の済んだ遺物から実測を開始した。測量図の図面整理の済んだ遺構については挿図の下図の作成に取り組んだ。遺跡分布図の作成にも着手した。

12月中旬には遺物の接合・復元がほぼ完了した。その後、遺物の拓本打ちにも着手した。同じ頃原稿執筆にも着手し、遺物実測図と遺構実測図のトレースを開始した。やや遅れて遺物の写真撮影を行った。また、遺構写真・遺跡全景写真などの焼付も行った。これに続き、実測図のトレース・写真焼付などのできあがったものから順次図版作成していった。12月下旬には挿図・写真図版の版組み・割付作業を開始し、原稿を含めた全体の割付にも取り組み始めた。この頃、遺構・遺物の原稿も段階的にできあがっていった。原稿・図版・割付の全体が完成したのは１月中旬であった。

１月下旬に印刷作業を委託し、２月上旬以降は校正等を行った。３月31日に本書を刊行して、整理・報告書刊行のすべての作業を完了した。

3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)　発掘調査（平成８年度）

理事長　荒井　桂
副理事長　富田真也
専務理事　吉川國男
常務理事兼
管理部長　稲葉文夫
理事兼
調査部長　小川良祐

管理部

庶務課長　依田　透
主　査　西沢信行
主　任　長滝美智子

(2)　整理事業（平成10年度）

理事長　荒井　桂
副理事長　飯塚誠一郎
常務理事兼
管理部長　鈴木　進

管理部

庶務課長　金子　隆
主　査　田中裕之
主　任　長滝美智子
主　任　腰塚雄二
専門調査員兼
経理課長　関野栄一
主　事　菊池　久
専門調査員兼
経理課長　関野栄一
主　任　江田和美
主　任　福田昭美
主　任　腰塚雄二

調査部

調査部副部長　高橋一夫
調査第二課長　大和　修
主任調査員　西井幸雄
主任調査員　大谷　徹
主　任　江田和美
主　任　福田昭美
主　任　菊池　久

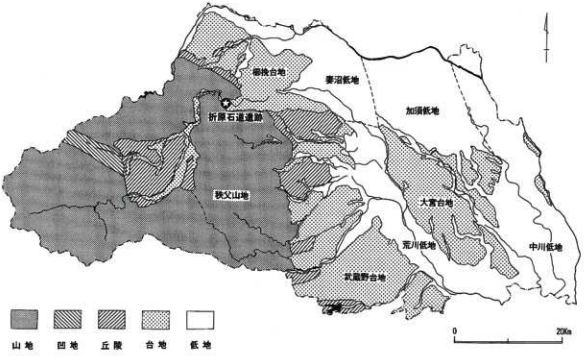
資料部

資料部長　増田逸朗
主幹兼
資料部副部長　小久保　徹
資料整理第二課長　市川　修
統括調査員　利根川章彦

Ⅱ　遺跡の立地と環境

折原石道遺跡は埼玉県大里郡寄居町大字折原に所在し、ＪＲ八高線・秩父鉄道・東武東上線寄居駅の西南西約1.9km、秩父鉄道波久礼駅の南東約1.8kmに位置している。寄居町は埼玉県の北西部にあり、荒川が秩父山地から平野部に流れ出てくる出口にあたり、荒川本流に面した地域には河岸段丘が発達している。町域の東部は平坦な台地が東方に開け、北東方向の深谷市・岡部町域の櫛挽台地と呼ばれる大きな台地に続いている。町域北端部は丘陵地形となっており、その最高点は標高330ｍの鐘撞堂山であり、市街地との標高差は約230ｍである。この丘陵は北西方向の美里町・児玉町方面の丘陵地帯に伸びている。市街地はこの丘陵を降りた荒川左岸の段丘面に乗っている。長瀞町の山岳地帯から流れてきた荒川本流の流れは、市街地の西端の藤田地区で南に屈曲し、寄居駅周辺で平坦面が最も広がる状況になる。そして鉢形城跡を乗せる右岸の段丘崖にぶつかり、左岸の中小前田地区あたりまで北東方向に流れを変え、その後は花園町川端あたりまではほぼ東西方向に流れ、花園町永田・川本町畠山あたりまでまた北東流した後、熊谷市街地まではおおむね東西の流れとなっている。「荒川扇状地」という地理的観点から考えると、寄居町の市街地区域の西方の波久礼は扇頂部の位置にあたり、寄居町用土、花園町武蔵野・小前田、寄居町小園・赤浜あたりが扇央部、熊谷市・深谷市・岡部町の市街地周辺の台地上が扇端部ということになろう。櫛挽台地は「荒川扇状地」形成期である約３万～１万年前より遡る５万年前に形成され（櫛挽面）、武蔵野面に相当する。寄居町の市街地やその対岸あたりの「荒川扇状地」上の地域はもう１段下の立川面相当の寄居面ということになる。右岸の丘陵は、折原石道遺跡の所在する折原地区の南は多摩面相当で標高150ｍ代の大山面、東の鉢形・露梨子・赤浜地区方面では、下末吉面相当で標高120～110ｍ代の江南面が形成されており、これらの段丘面各所を利用して、先史時代から歴史時代の遺跡も形成されていたのである。

第１図　埼玉県の地形



第２図　周辺の遺跡（１）

1　折原石道遺跡　2　南大塚遺跡（旧、縄・早前中、平）　3　金袋遺跡（旧、縄・中、奈・平）　4　末野遺跡（旧、古・後、奈・平）
5　黒耀台遺跡（旧、縄・前中、平）　6　用土堀込遺跡（縄・早中、古・後、奈・平）　7　ゴシン遺跡（縄・早前、古・後、奈・平）
8　大塚遺跡（縄・早、古）　9　平林２遺跡（縄・早中）　10　入田２遺跡（縄・早）　11　平倉遺跡（縄・早、平）　12　前耕地遺跡（縄・早、平）　13　羽毛田遺跡（縄・前晩）　14　甘粕原遺跡（縄・前中、古・後、平）　15　むじな塚遺跡（縄・前中、古・前後、奈・平）　16　上郷西遺跡（縄・前中後）　17　東国寺東遺跡（縄・前中）　18　塚屋・北塚屋遺跡（縄・前中）　19　増長寺遺跡（縄・中）　20　氷川台遺跡（縄・中、平）　21　中島遺跡（縄、平）　22　露梨子遺跡（縄・中、古・後、奈・平）　23　伊勢原遺跡（縄・中、弥・後、古・前）　24　宮の前遺跡（縄・中）　25　桜和田遺跡（縄・中）　26　麓ノ下遺跡（縄・前後、古墳、平）　27　鉢形東遺跡・東B地点遺跡（縄・後、古・前）　28　入田１遺跡（縄・中後）　29　南藤田遺跡（古・前）　30　八幡台遺跡（縄・中後）　31　花園御岳城跡（中世）　32　中芝遺跡（古・前）　33　東伊場地遺跡（古・前、奈・平）　34　猪俣南古墳群　35　上寺西遺跡（古・前、奈・平）　36　用土前原遺跡（古・後、奈・平）　37　城見上遺跡（縄・前、古・後、奈・平）　38　小前田古墳群　39　藤田古墳群　40　鶴石遺跡（古墳、平）　41　桜沢古墳群　42　壁ヶ谷戸古墳群　43　木ノ根沢古墳群　44　伊勢原古墳群　45　小園古墳群　46　立ヶ瀬古墳群　47　上郷古墳群　48　末野元宿遺跡（縄・中、平、中世）　49　大正寺南遺跡（平）　50　桜沢上の原遺跡（縄・中、平）　51　馬場ノ内廃寺（奈・平）　52　菅居廃寺（平）　53　吉野廃寺（平）　54　三ヶ山窯跡（古・後）　55　折原窯跡（平）　56　桜沢窯跡（平）　57　鉢形城跡（中・近世）　58　要害山城跡（中世）　59　花園城跡（中世）　60　折原堀之内遺跡（中世）　61　大正寺遺跡（中世）　62　阿部鉄丸陣屋跡（近世）　63　大河内金平衛陣屋跡（近世）　64　用土北沢遺跡（縄・中後、古・後、奈・平）　65　猪俣北古墳群　66　井の岡遺跡（縄・中、中世）　67　岡田遺跡（奈・平）　68　出羽塚遺跡（奈・平）　69　郷引遺跡（平）　70　三軒屋遺跡（平）　71　南坂塚遺跡（平）　72　用土谷津遺跡（縄・中、古・後）　73　高城遺跡（縄・中、古・後）　74　柿林遺跡（奈・平）　75　平松遺跡（縄・中）　76　次郎平遺跡（古・後、平）　77　丸山遺跡（平）　78　中小前田１遺跡（縄・前中、古・後）　79　中小前田２遺跡（縄・前中、古・後）　80　灰田原遺跡（縄・前、平）　81　久々戸後谷遺跡（縄・前）　82　久々戸道上遺跡（平）　83　前久々戸遺跡（縄・早）　84　上平道上遺跡（縄、奈）　85　梅沢遺跡１（縄・中）　86　梅沢遺跡２（縄・中）　87　長久保遺跡（縄）　88　折原上原遺跡（縄・中）　89　折原上台遺跡（縄・前）　90　下小路遺跡（縄）　91　愛宕原遺跡（縄・中）　92　坂上遺跡（平）　93　浜沢上遺跡（縄、平）　94　普門寺古墳群　95　岩崎遺跡（縄）　96　堂木遺跡（縄、中世）　97　末野原遺跡（縄・中）　98　大町遺跡（縄・中、中世）　99　北側上町遺跡（縄・中、古）　100　南陣上町２遺跡（平）　101　羽黒山古墳群　102　旧不動寺跡（中世）　103　旧鉢形中跡遺跡（平）　104　柏沢１遺跡（縄・中、平）　105　柏沢２遺跡（縄・中、平）　106　東原遺跡（縄・中、平）　107　大谷久保遺跡（縄）　108　上ノ前遺跡（縄）　109　平林遺跡（古）　110　不動寺館跡（中世）　111　根岸入沼窯跡（平）　112　町田耕地遺跡（古）　113　日向山遺跡（縄・前中）　114　横屋遺跡（縄・前中後晩）　115　桜沢堀の内遺跡（中世）

本章では、今回報告する折原石道遺跡に関連する周囲の遺跡の状況について、寄居町域を中心に概略を述べることにしたい。

旧石器時代の遺跡は、埼玉県北部地域においては、大里ロームの堆積が確認されている区域に散見されるが、石器が集中して発見される遺跡が乏しい。この時期の石器が発見されたのは町域東部で荒川右岸の赤浜地区の牛無具利遺跡・鵜巻遺跡、今市地区の稲荷窪遺跡、西部の折原地区の南大塚遺跡、荒川左岸南飯塚地区の金嶽遺跡、末野地区の末野遺跡、鉢形地区の薬師台遺跡がある。牛無具利遺跡はナイフ形石器・掻器・石核等450点にも及ぶ石器が5ｍ×3ｍのブロックに集中した状態で確認された。末野遺跡からは県道広木折原線関係の調査で、6ｍ×7ｍのブロックから局部磨製石斧・打製石斧・ナイフ形石器・台形様石器・石刃等26点を出土し、埼玉県最古の石器群の1つとされている。稲荷窪遺跡からは掻器等5点が出土し、南大塚遺跡ではナイフ形石器3点が表面採集され、金嶽遺跡からは掻器等が出土し、薬師台遺跡からはナイフ形石器が採集されている。まとまった石器群をもつ遺跡は寄居面に所在するが、相対的には江南面以上の標高の高い場所に多くの遺跡が形成される傾向があるようである。

また、これらの遺跡よりもやや時期の下る細石刃を主体とする石器群を大量に出土したのが、荒川右岸でやや下流寄りの川本町本田の丘陵上の白草遺跡である。この遺跡からは川本春日丘工業団地建設の事前調査によって細石刃478点等、剥片等を含めると4,416点が出土した。

縄文時代草創期の遺跡はまだ寄居町域では確認されていない。櫛挽台地上の花園町宮林遺跡で爪形文・押圧縄文・回転縄文・条痕文等の土器類およびそれを伴う竪穴住居跡が検出されており、用土地区から続く丘陵上の美里町如来堂遺跡からも爪形文・押圧縄文・回転縄文等の土器少量が出土している。

縄文時代早期前半においても、北方の櫛挽台地上の用土堀込遺跡から撚糸文土器と田戸下層式併行の押型文土器が検出されている程度である。早期後半～終末期段階には荒川右岸鉢形地区・折原地区の南部の丘陵上のゴシン・大塚・平林2・入田2・南大塚・平倉等の遺跡、北の用土地区の用土堀込遺跡等に貝殻条痕文土器の出土が知られる。この頃から江南面に遺跡が展開し始めるようになる。

前期初頭頃もあまり多くなく、花積下層式段階では荒川右岸立原地区の前耕地遺跡、関山式段階では右岸保田原地区の羽毛田遺跡等数か所にすぎない。前期中葉の黒浜式段階以降、大きな集落遺跡が散見されるようになり、諸磯式段階あるいは中期段階まで継続する遺跡も目立つようになる。折原地区の南大塚遺跡においては関山式～黒浜式にかけての竪穴住居跡約70軒が検出された。また、鉢形地区の甘粕原遺跡では黒浜式～諸磯ｂ式の住居跡3軒、ゴシン遺跡では黒浜式～諸磯ｂ式の住居跡4軒、富田地区のむじな塚遺跡でも黒浜式～諸磯ｂ式の住居跡11軒、上郷西遺跡では諸磯ａ～ｃ式の住居跡4軒、折原地区の東国寺東遺跡にも諸磯式期の住居跡を検出した。荒川左岸の寄居町域と花園町域の境界付近に所在する塚屋・北塚屋遺跡でも諸磯ａ～ｂ式期の住居跡25軒が検出され、大きな集落跡が展開している。さらに下流の花園町域・川本町域でもこの時期、特に諸磯式期の集落跡は数多く発見されており、荒川中流域の縄文時代集落跡が安定して形成される時期である。

中期になると、大規模な集落跡の形成がさらに進むようになる。中期前半の勝坂式段階ではまだ前代の諸磯式段階と同じ程度の数しか遺跡が確認されていないが、後半の加曽利E式段階には遺跡数が約3倍に増加し、寄居町域全体に遺跡の分布が認められる。荒川右岸の加曽利E式期の集落跡は上流側から南大塚・東国寺東・増善寺・平倉・氷川台・薬師台・平林2・甘粕原・ゴシン・露梨子・伊勢原・宮の前・庚申塚等非常に多数であり、この地域の遺跡の大半を占める状況である。

縄文時代後期にはあまり大きな集落跡が形成されなくなるが、後期初頭を中心に20か所前後の遺跡が荒川

右岸を中心に形成されている。荒川左岸寄居地区の樋ノ下遺跡では称名寺式～堀之内式段階の柄鏡形9軒を含む13軒の敷石住居跡が検出された。右岸では富田地区の上郷西遺跡、鉢形地区の鉢形東遺跡等で敷石住居跡が確認されている。

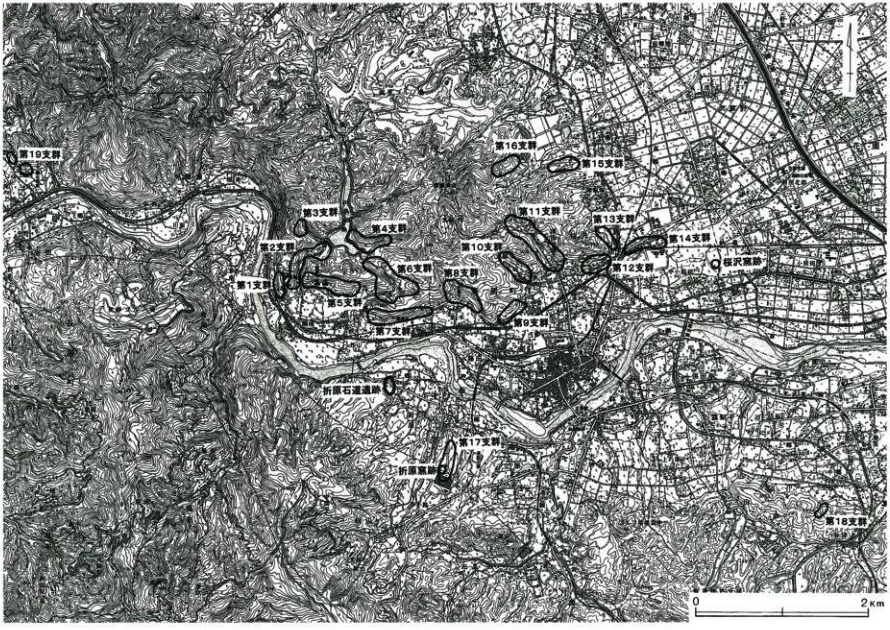
縄文時代晩期に遺跡は急速に衰退していくようであり、羽毛田遺跡で土器片が採集された以外には見るべき遺跡がない。

弥生時代の遺跡も多くはない。北方の用土地区に弥生時代中期後半と考えられている用土・平遺跡がある。この遺跡は東京大学の調査で倉庫ではないかとされる2軒を含めて12軒の竪穴住居跡が検出され、中部高地や群馬県地域と関連する櫛描文土器のまとまった資料を提供した。また、磨製石鏃・打製石包丁・有角石斧・打製石斧・磨製石斧等178点もの石器類も特筆される。その他用土地区に数か所の遺跡が確認されているが、内容は明らかでない。弥生時代後期には比企地方を中心とする吉ヶ谷式土器をもつ住居跡が富田地区の伊勢原遺跡で確認された。この土器は比較的近いところでは、川本町白草・円河弥・焼谷・四反歩等川本春日丘工業団地内遺跡群にまとまっており、江南町でも丘陵地帯を中心に確認されるが、寄居町の段丘面に降りてきている例はあまり多くない。

古墳時代に入ると、また荒川両岸の寄居面へ集落跡が進出してくる。古墳時代前期の集落跡は右岸の富田地区・赤浜地区近傍にまとまっているが、後期には塚田地区・鉢形地区にも広がってくる。左岸では、弥生時代以来の開発の進展によるものか、引き続き用土地区に集落跡が認められる。用土地区の南藤田遺跡は五領式～和泉式段階の住居跡8軒が確認され、S字状口縁台付甕をやや多量に出土した。これに対して富田地区の伊勢原遺跡では五領式期の住居跡16軒とまとまりのある集落を検出しながら東海系土器の影響は一部の高坏に見られる程度で南関東的な土器群を主体としていた。鉢形地区の鉢形東遺跡・東B地点遺跡、赤浜地区の塚田赤木遺跡でもS字甕の出土が知られる。富田地区のむじな塚遺跡・中芝遺跡でもそれぞれ五領式、和泉式の土器の良好なセットが確認されている。また、東伴場地・稲荷東・上寺西遺跡等も五領式～和泉式段階の遺跡である。

古墳時代後期～終末期では、鉢形地区周辺の甘粕原・露梨子・ゴシン遺跡が比較的まとまった集落跡である。用土地区の用土前峯遺跡、赤浜地区の東伴場地遺跡にも割合まとまった集落形成があったらしい。この時期の集落跡は奈良・平安時代まで継続するものもある。末野地区の末野遺跡や城見上遺跡にも奈良・平安時代の住居跡に混じって、古墳時代後期～終末期の住居跡が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、小円墳で構成される古墳群も荒川両岸に数多く認められるが、今のところ前期に遡るものはなく、後期～終末期にほとんどの古墳が築造されたといってよい。荒川左岸側では花園町との境界にある小前田古墳群が古墳数が最も多く、1994年現在で97基が所在していたことが確認されたが、その後も寄居町教育委員会の調査で古墳跡が検出されている。過去に東京大学が3基、立教大学が4基、埼玉県教育委員会が20基調査している。埴輪の樹立が確認された古墳もかなりあり、6世紀後半あたりから築造が開始されるらしく、7世紀後半まで追葬が続くようである。ほとんどの古墳は河原石使用の胴張りプランの横穴式石室を埋葬施設としているが、国道140号バイパス道路の事前調査では箱式石棺や円筒埴輪棺も確認された。また、樋ノ下遺跡でも18基の円墳が調査され、12基から河原石積み横穴式石室が検出された。小前田古墳群とほぼ同時期である。この他に左岸側では、寄居町の市街地西方の藤田地区に藤田古墳群（推定11基）、末野地区の箱石遺跡に横穴式石室を主体にする古墳群が検出されている。箱石遺跡には凝灰質砂岩の切り石積みの横穴式石室を埋葬施設とした古墳も調査されており、埴輪も出土している。また、小前田古墳群の北西約600mにある桜沢古墳群は現存1基だが、かつては10数基あったと言われている。北の用土地区にも壁ヶ谷戸古墳群（現存7基）、木ノ根沢古墳群（現存1基）が所在しているが、実態はよくわかっていな



第3図　周辺の遺跡（2）（末野窯跡群）

い。木ノ根沢古墳群の1基は径34mと中規模の円墳であり、荒川河岸段丘上では、比較的大きい古墳である。

荒川右岸の古墳群は、下流の川本町域では調査例が豊富であるが、寄居町域にはあまり調査例がないため、左岸に比較して実態がわからないものが多い。下流側から述べる。赤浜地区の赤浜古墳群には3基が現存しており、1基の周堀が調査されたが、遺物が出土していない。かつて人物埴輪の出土が伝承されており、6世紀代から築造されていた可能性もある。富田地区には東武東上線男衾駅北側からやや東にかけて伊勢原古墳群が所在している。現存2基であるが、かつて数基の古墳が点在していたとされ、埴輪が確認されないため、7世紀代の築造と言われる。その北西約600mには小園古墳群、下流の玉淀大橋近傍には立ヶ瀬古墳群があるが、実態不明である。男衾駅の西北西約1.3kmには上郷古墳群がある。現存5基であるが、やはり10数基規模であったと思われ、埴輪を持たない河原石積み横穴式石室の古墳群であろう。

奈良・平安時代には、荒川左岸の末野地区から桜沢地区にかけての丘陵地帯の中に武蔵地域の「四大窯跡群」の1つとして知られた末野窯跡群（後述）が最も重要な遺跡であるが、古代窯業生産の展開に応じて、この時期の集落跡も丘陵内や丘陵縁辺部下の段丘面に発達する傾向がある。奈良・平安時代の遺跡は先にあげた古墳時代後期～終末期の集落跡が継続している場合が多く、すでに触れたもの以外でも、荒川右岸では露梨子・東伴場地・むじな塚遺跡等がこの例に該当する。古墳時代から継続していない遺跡は、平安時代になってから形成される小規模な集落遺跡が多く、縄文時代に集落形成していた丘陵内や段丘面の遺跡に再び居住しているものとして、左岸の樋ノ下・末野元宿・大正寺南、右岸の折原石道・南大塚・愛宕山東・氷川台・前耕地等の遺跡がある。また、北方の用土地区から岡部町・美里町の境界付近の丘陵地帯にも平安時代のまとまった遺跡が分布しており、北坂遺跡からは官衙遺跡風の建物群、甘粕山遺跡群の東山遺跡からは瓦塔・瓦堂のセットを伴った建物群、沼下・平原遺跡からは比較的まとまった住居跡群が検出されている。これらは一つの政治的・宗教的拠点と考えられるかもしれないが、平安時代の集落跡の動向に沿って形成されたのかもしれない。

古墳時代後期には下位の段丘面である寄居面を開発して耕地を拡大していた各集落群が廃絶し、丘陵地域に進出していくのは水稲耕作依存から新たな生産手段の獲得へ転換していったためであろう。寄居町域とその周辺においてはその重要な要素の第一として窯業生産を考えることができる。

ところで、寄居町周辺地域は児玉郡地域とともに古代寺院跡が集中している地域である。末野の丘陵地帯の最高峰である鐘撞堂山の下方の平場には馬騎ノ内廃寺が確認されている。この寺院跡はあまり広くない16の平場に建物を建てていたようであるが、標高246mの第2平場に瓦の散布が見られ、中心建物跡と考えられ、隣接する第3平場にも礎石と瓦が確認できるようである。素弁十葉・複弁七葉・複弁八葉蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が確認されており、素弁十葉蓮華文軒丸瓦が古い段階にあたるとされ、7世紀後半あたりの創建を推定されている。この寺院跡の南南東約1.7kmの六供地区には平安時代創建とされる寄居廃寺があり、東北東約1.7kmにも吉野廃寺がある。また、荒川右岸の東伴場地遺跡でも瓦を伴う基壇状遺構を検出しており、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、篦描二重弧文・三重弧文軒平瓦、斜格子目叩き平瓦が出土している。この遺跡の複弁八葉蓮華文軒丸瓦は児玉町金草窯跡出土の軒丸瓦と型式学的に近似しており、国分寺創建期（8世紀中葉前後）あたりと考えることができる。先に触れた東山遺跡の瓦塔・瓦堂を伴う建物群も仏教的遺跡としてこれに加えなければならないが、時期的にはやや新しく、9世紀初頭なので、伽藍寺院の展開よりは後出的動向として考えなければならない。

最後に、古代窯業生産に関連する遺跡に触れる。末野窯跡群については、第3図に各支群の位置を示した図を掲載した。末野窯跡群として現在把握されている地域で最も西にあたるのは長瀞町野上下郷の小坂地区

の窯跡（第19支群）であり、最南・東端は荒川右岸の富田中郷根岸入沼の窯跡（第18支群）、最北端は鐘撞堂山東方の第15・16支群である。東西約9.5km、南北約4.3kmにも達する広範囲に窯跡が確認されており、19の支群に分けて把握している。波久礼から桜沢までの荒川左岸丘陵地帯の、狭義の末野窯跡群でも東西約4.3km、南北約2kmの範囲に90基を超える窯跡が確認されており、荒川右岸や長瀞町域まで含めた範囲ではまだ数多くの窯跡が眠っていると思われ、総数数百基の大窯跡群と考えてよいだろう。

現在判明している古い段階の窯跡は、第Ⅰ支群Aに7世紀中葉～後半、第5支群に6世紀末～7世紀初頭の時期の窯があるが、荒川左岸の三ヶ山地区の丘陵内から焼き台・窯壁が付着した須恵器フラスコ形提瓶が採集され、その採集地点に焼土が確認されたことからこれも7世紀中葉頃の窯跡と考えられている。このうち第5支群の窯跡からは、行田市埼玉古墳群の、中の山古墳に供給されたと考えられる、いわゆる「須恵質埴輪壷」が出土しており、小前田古墳群をはじめ、県北地域の多くの後期古墳にもこの窯跡やその周辺の未発見の同時期の窯跡から須恵器が供給されたと推定される。8世紀代には円良田湖周辺の第1・2・5・6・7支群、東の第11・16支群が操業しているようであるが、9世紀代にはこの窯跡群の最盛期を迎えるようであり、ほぼすべての支群での操業が確認できそうである。この頃長瀞町域の第19支群も操業している。10世紀代にも下火になりながら、なおも操業を続けるのが、第5・6・7・8・9・13・14・15・16支群であり、第17支群とした荒川右岸の折原窯跡、第18支群、桜沢窯跡等も操業していることが知られている。初期的な群はすでに操業停止しているが、9世紀代よりさらに外側に拡散していることがわかる。昨年、荒川右岸沿いでやや下流の川本町如意遺跡で平場の須恵器窯跡が確認されたが、これも10世紀代の末野窯跡群の操業拡散現象の一つと考えてよいかもしれない。折原石道遺跡でも、窯跡とは呼べないけれど土器を焼成したのが明らかな土壙状の遺構を検出した（第Ⅳ章参照）。これも末野窯跡群の拡散現象の一端、武蔵北部地域の古代窯業生産の様相の一断面として認識する必要があるのではないかと思う。

中世の遺跡は、右岸の鉢形城跡が戦国時代後半期を中心とした時期に整備された城跡として古くから著名であり、近年では寄居町教育委員会による史跡保存整備事業に伴う発掘調査が進められており、城跡の構造がかなり解明されつつある。また、波久礼駅の対岸の丘陵上に所在した要害山城跡は、県道長瀞玉淀自然公園線建設の事前調査で、三の廓の4つの平場が調査されており、後北条氏の武田氏に対抗する備えとして平時の「早期警戒型物見台」としての機能を想定する意見もある。末野地区の秩父鉄道を見下ろす標高200mの尾根上にも花園城跡が所在するが、未調査のため、実態はよくわかっていない。なお、これらの城跡に付随して武士団の居住遺跡として想定されているものとして、花園城跡の下の段丘面の末野元宿遺跡、折原石道遺跡に隣接する折原堀之内遺跡、寄居駅北側の大正寺遺跡等の中世集落跡、近世の陣屋跡として、鉢形城跡の近傍に阿部鉄丸陣屋跡・大河内金兵衛陣屋跡等が知られている。

Ⅲ　遺跡の概要

折原石道遺跡は埼玉県大里郡寄居町大字折原地区に所在し、ＪＲ八高線・秩父鉄道・東武東上線寄居駅の西南西約1.9kmに位置している。東経139°10′35″、北緯36°6′31″付近に遺跡の中心部がある。

遺跡は荒川右岸に形成された標高104～105ｍの河岸段丘上に立地している。段丘面は南西から北東の方向に緩やかに傾斜し、河岸部は荒川本流による侵食が激しく、急な段丘崖となっている。折原石道遺跡の東北東約800ｍ付近の荒川本流は大きく右に屈曲して流路を変えており、左岸の藤田地区のあたりが攻撃面になっている。右岸の平坦面～緩斜面は東西約800ｍ、南北約600ｍの範囲に半月形を呈して広がっており、折原石道遺跡はこの中の最も西寄りの区域に所在している。遺跡の範囲は南北約190ｍ、東西約100ｍ程度で狭く、南東端は琴平山の北東側山麓にあたっている。遺跡の東側100ｍ程の位置には鎌倉時代の館跡とされる折原堀之内遺跡があるが、同じ平坦面には他の遺跡の所在が判明していない。そのため、折原石道遺跡もこの館跡に関連する中世の遺跡として考えられてきた。これら２遺跡以外の遺跡は一段上の段丘面である丘陵

第４図　折原石道遺跡の位置と調査区

第５図　折原石道遺跡全測図

上に乗っているものがほとんどである。昭和58年度に平安時代の窯跡2基が調査された折原窯跡も丘陵上に立地しており、その周囲は縄文時代前期の大集落である南大塚遺跡である。

調査は、県道広木折原線の建設事業に伴い、平成9年1月1日から平成9年3月15日までの3か月弱の期間実施された。今回の調査区は、遺跡の中央を道路幅で縦断する形になっており、この調査によって遺跡の性格や様相はおおむね把握されたと思われる。

以下、調査結果について概要を記述する。

今回の調査区は、現道部分によって三つに区切られており、それを便宜上北側からA区・B区・C区と呼称しておく。A区には道路状遺構1か所、南端部のC区にも土壙6基しかなく、遺跡の中央部のB区に遺構のほとんどが集中していたことになる。特に、B区でも南の山寄りの部分は検出された遺構の密度が高かった。遺構の総数は平安時代の竪穴住居跡4軒・土器焼成遺構1基・土器焼成関連遺構1基・土壙15基、中世～近世の土壙36基・溝跡2条・道路状遺構1か所・柱穴55本・集石遺構3基である。

平安時代の住居跡は、一辺4ｍ前後の方形あるいは長方形を呈するものであり、住居の東壁中央にカマドを付設している。住居跡群はあまり集中した分布になっていない。カマドの芯材として片岩が多用されており、第2号住居跡ではカマド近傍に敷石状に片岩が置かれていた。第1号住居跡だけは、同一壁面に2基のカマドが並列して検出されたが、北寄りのカマドは調査の最終段階で見落としに気付いて調査したほどで、あまり焼けておらず、南側のカマドが造り替えの新しいカマドと考えられ、こちらはよく使われていたようである。出土遺物は須恵器坏・高台付坏・土師器甕を中心とした土器類がほとんどであるが、土師器に近い赤焼きなのに須恵器の製作技法で作られた坏類が多い。第1号住居跡からは羽釜がまとまって出土している。土器以外では、第1号住居跡の覆土上層から丸瓦片、第3号住居跡から石製紡錘車・管状土錘・鉄滓が検出されたのが興味深い。

住居跡群の南には土器焼成遺構・土器焼成関連遺構が検出されている。確実に土器を焼いていた遺構は1基しか検出できていない。大きさ1.7ｍ×1.3ｍの楕円形を呈する皿状の掘り込みの土壙の形をとっている。底面が被熱により赤く変色し、覆土に多量の焼土・炭化物を含んでいた。この遺構の下層及び北側の7ｍ×7.5ｍの範囲に土器焼成関連遺構とした大きな穴があるが、焼土・炭化物を含む土が堆積している部分が多く、この大穴のあちこちで土器を焼いていた可能性もあり、土器を焼いた燃料である炭や木材の屑をまとめて廃棄した穴かもしれない。この遺構の様相や性格については、本文や結語で特論する。

さらにその南に土壙群・柱穴群がある。土壙は全体で51基であるが、覆土に焼土・炭化物を大量に含むものが15基ある。そのいくつかからは土師器甕・羽釜などが出土し、平安時代に属すると考えられる。36基にはほとんど遺物が伴わず、中・近世と考えた。ただし、第41号土壙からは石臼片やカワラケ、第45号土壙からは滑石製の温石のような特徴的遺物も出土している。

溝跡は、住居群の分布域にやや幅広で調査区を横断する第1号溝跡、南部の土壙群中にL字形に屈曲した第2号溝跡がそれぞれ検出された。第1号溝跡の覆土上層からは常滑の大甕片が出土しているため中世の時期と考えられる。第2号溝跡は周囲の柱穴群を区画するものと思われ、中・近世にあたるものであろう。

A区には道路状遺構だけが検出された。幅3ｍを測り、両側に幅50cm、深さ30cm程度の側溝状掘り込みが確認された。ただし、明確な硬化面はなく、出土遺物もほとんどないため、時期が明確でなかった。土層観察からは近世以降と推定される。

南部の土壙群・柱穴群中には、集石遺構3基が確認された。3基とも径1ｍにも満たない小さなものであり、人頭大の片岩の板石を主体として石を並べていた。片岩等は被熱により赤色化していた。伴出する遺物も少なく、遺構の性格・時期は明らかでない。

Ⅳ　遺構と遺物

1　平安時代

(1)　竪穴住居跡

今回の折原石道遺跡の調査においては、竪穴住居跡は、遺跡全体の中央部にもあたる調査区中央部のB区に集中して検出された。道路幅であるため分布の傾向をすべてつかめたとはいえないであろうが、住居跡の分布の密度は必ずしも高いわけではない。第Ⅲ章でも少し触れたが、カマドの方向を共通することも主な特徴にあげうる。以下に個別に記述していきたい。

第1号住居跡（第6～11図）

第1号住居跡は4軒の中では最も南に位置し、B区中央付近の西壁にかかって検出された。住居跡の東壁を中心とした部分が調査区内に入ったのみであり、住居全体の7割近くは確認されていないが、幸いにしてカマドを付設した壁が東壁であったため、カマド付近の遺物が豊富な部分のほとんどを調査することができた。住居の深さは30cm程であり、東壁の長さは4.7mを測る。一辺5m弱の隅丸方形の住居跡を予想することができるが、この規模では平安時代としてはやや大きめの住居跡となる。住居の主軸方向はS－49°－Eで、南東方向である。東壁の中央やや南寄りにカマドA、その北寄りにカマドBの二つのカマドが確認された。カマドAの煙道は東壁から約1m突出しており、カマドBは約0.6m突出している。煙道が突出する方向は、住居東壁から直角に出ているのではなく、双方のカマド共にほぼ同一方向でやや左寄り（北寄り）に向いている。カマドAは内壁がよく焼けており、カマド内の覆土にも焼土・炭化物が多量に含まれていて、よく使用された状況が確認された。それに対してカマドBは、調査の終盤まで所在の確認ができなかったほどであり、内壁はあまり焼けておらず、焼土・炭化物もわずかしか含まれていなかった。ここから考えられるのは、北寄りのカマドBが古く、その後、カマドAに造り替えて、期間的にはカマドAをより長期に使用していたということである。また、カマドAの両側の壁はやや段違いの状態になっているが、あるいは棚状施設の存在を考慮すべきかもしれない。

カマドAの前面の床面上には径67cm、深さ46cmの小土壙があり、ここに須恵質の羽釜が入った状態で検出された。また、カマドA前面や左側面の床面付近には特に、遺物が多かった。完形に近い坏・椀類はこのあたりにかたまって出土した。

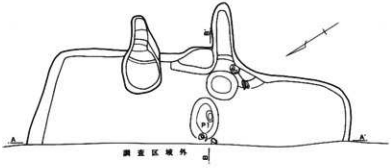
覆土上層にも、住居跡南東コーナーを中心に遺物が集中している部分があったが、ここでは丸瓦片がやや散在気味に検出されたのが目立つ。

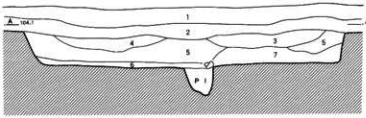
以下、個々の遺物について簡単に述べる。

第1号住居跡には、羽釜の出土が目立っており、正確な形態が把握できるもので2点、復元実測したものまで加えると4点ある。1点は暗赤褐色気味の赤焼きで、他の3点は須恵質の焼きである。第10図33は底部を除く全体がよく残っており、須恵質である。器形のバランスはとれているが、横断面楕円形で横方向の歪みがある。ロクロ整形されているが、胴部中位以下は斜め方向のヘラケズリが施されている。ほぼ同じ特徴をもつ破片がもう1点ある（第9図31）。赤焼きの羽釜（第9図30）もロクロ整形されているが、ヘラケズリの範囲は広く、鍔のすぐ下から上下2段以上のケズリになっており、調整手法は土師器甕と共通する特徴をもつ。もう1点（第9図32）は須恵質の焼きであるが、胴部内外面全体がヘラケズリを最終調整としており、この破片が最も土師器甕に近い調整をしていたことになる。

土師器甕も復元実測したものを含めて9点図示した。口唇部に沈線上の凹線か緩い面をもち、コの字状口縁の形態がくずれてややだれた「く」の字状の口縁部になることと、胴部上位にヨコヘラケズリ、胴部中位以

第6図　第1号住居跡

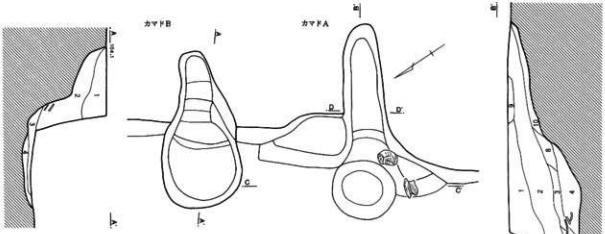




SJ1

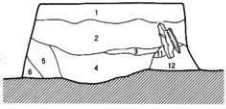
1　10YR　4/2　灰黄褐色　耕作土。
2　10YR　3/2　黒褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
3　10YR　3/3　暗褐色　焼土粒・炭化物粒多量に含む。炭化材混入顕著。
4　10YR　3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
5　10YR　3/4　暗褐色　焼土粒少量、炭化物粒やや多く含む。
6　10YR　2/3　黒褐色　焼土粒・炭化物粒多量に含む。
7　10YR　4/4　褐色　砂質。焼土粒・炭化物粒少量含む。

0　2m



SJ1カマドA

1　10YR　3/4　暗褐色　焼土ブロック・炭化物粒少量含む。
2　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
3　10YR　4/4　赤褐色　砂質。焼土ブロック多量に含む。
4　10YR　5/6　黄褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
5　10YR　3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物粒少量、小礫若干含む。
6　10YR　5/4　にぶい黄褐色　砂質。炭化物粒少量含む。
7　10YR　5/4　にぶい黄褐色　砂質。焼土粒・炭化物粒少量含む。
8　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
9　10YR　4/4　赤褐色　焼土ブロック多量、炭化物粒少量含む。
10　10YR　5/6　黄褐色　焼土ブロック多量に含む。
11　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック多量に含む。
12　10YR　5/4　にぶい黄褐色　砂質土・粘質土を混入したソデ構築土。

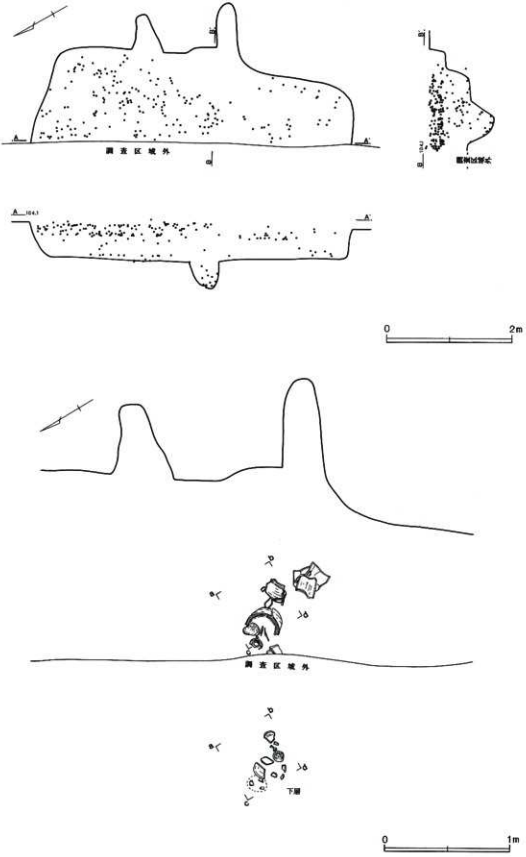


SJ1カマドB

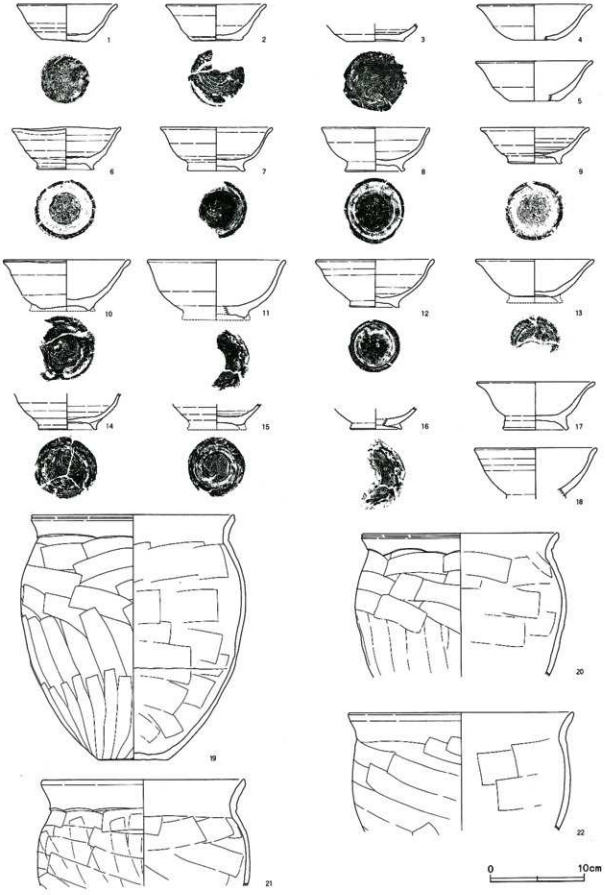
1　10YR　4/2　灰黄褐色　焼土粒・炭化物粒少量、小礫多量に含む。
2　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック・小礫多量に含む。
3　10YR　4/3　にぶい黄褐色　焼土粒・炭化物粒多量に含む。
4　10YR　5/2　灰黄褐色　砂質土・焼土粒少量含む。

0　1m

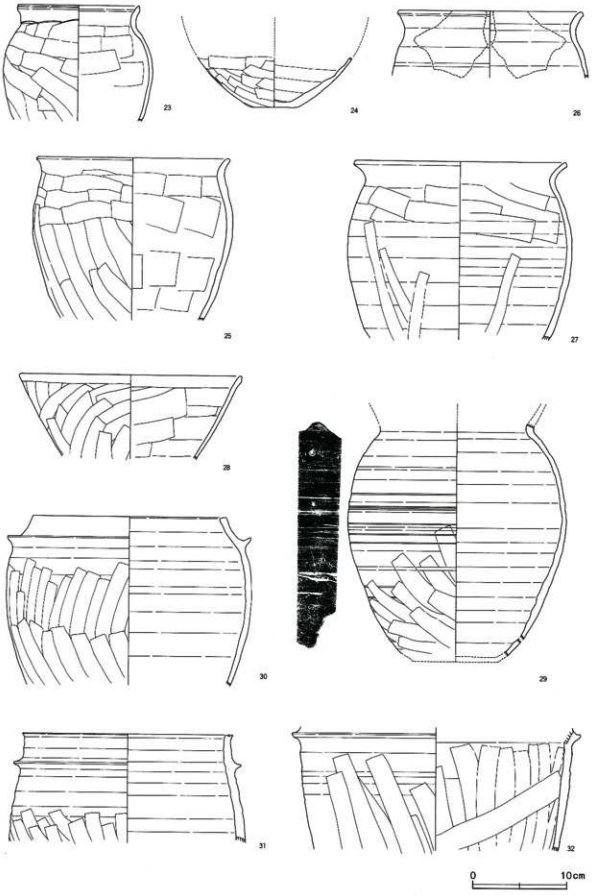
第７図　第１号住居跡遺物分布



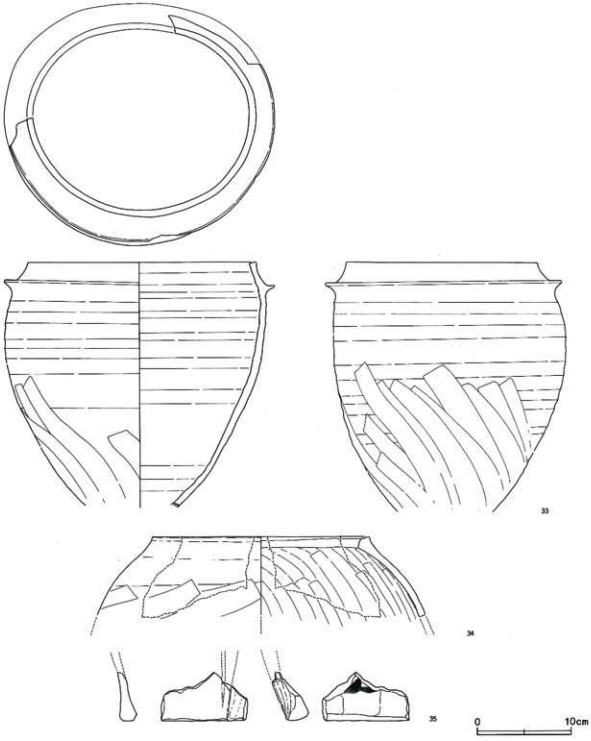
第8図　第1号住居跡出土遺物（1）



第９図　第１号住居跡出土遺物（２）

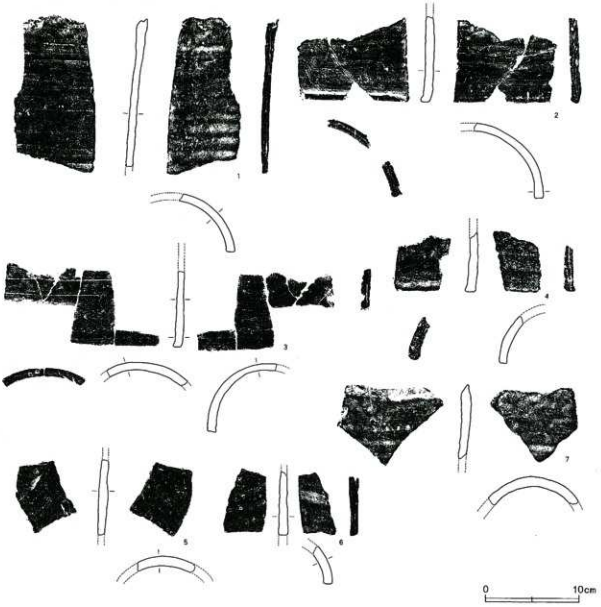


第10図　第１号住居跡出土遺物（３）



下がナナメヘラケズリになる「武蔵型甕」特有の調整手法を残すものと、ロクロ調整になっていながらヘラケズリを多用するものの二者がある。甕の破片数は多かったが、復元がむずかしく、全体がわかりにくい胴部破片はやや大きなものでも図示していない。須恵器の中型の甕もあったが、口縁部も底部も出土していないため、細部は不明であるが、長い外反する頸部で平底を有する通常の形態であろう。肩をもつ器形ではなく、倒卵形に近い胴部形態で、ロクロ目もしっかり残されているものである。胴部下半にヘラケズリが施さ

第11図　第１号住居跡出土遺物（４）



れている特徴は羽釜と共通する。

坏・椀類は、矮小化した平底の坏と高台付きのやや大型の椀となるが、かなりの比率で酸化炎焼成になってしまったものが占める。体部から口縁部の立ち上がりの形態は緩く内彎し、口唇部だけが小さく外反気味となる形態は坏・椀に共通している。口径・底径・器高の比が厳密な段階ではなく、細かく見れば、器形のバリエーションは多い。おおむねロクロ回転糸切り離しの技法で、底部を切り離しているが、高台付きのものは、高台貼り付けの時に底面全体をナデてしまっているものが多いが、これは底部が小さくなってしまったためであろうか。

この住居跡の出土遺物で興味深いのは、カマド形土器すなわち「置き竈」と丸瓦である。カマド形土器の出土は埼玉県においてはごくわずかであるため、この例もあるいは事実誤認かもしれないが、２点あり、１点は口縁部つまり器受部、もう１点は底部の前面の焚き口付近の鍔部の末端が残る部分である。焼成は硬いが、焼き質は土師質に近く、表面の調整も、残存部に限ったことではあるが、よくナデられている。口縁部内面は丁寧な斜め方向のヘラナデである。口縁部破片から推定すると、羽釜の鍔部直下の胴部径に合致する

可能性が高く、あるいは屋外調理用として置かれていたものが住居群の廃絶と共に廃棄された破片とすることができるかもしれない。

丸瓦の破片は7点ある。ただし、小さな破片は曲率から判断したもので、あるいは須恵器の小型甕かもしれないものもある。通常の瓦であれば、凸面はタタキ板に巻かれた縄目のタタキ目痕で、凹面は布目痕となるはずであるが、第1号住居跡出土例はすべてロクロ目である。模骨を利用しないで、ロクロ上で円筒管を作り上げ、ロクロからはずしてから、刀状の工具で2分割する整形技法によって作られたと推定される。葺かれる時に軒側になる先端部はやや丸く肥厚しており、屋根頂部側になる末端部は断面三角形で尖り気味に作られる。

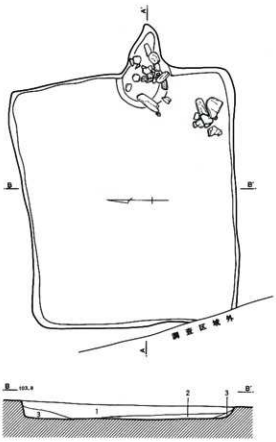
第2号住居跡（第12～15図）

第2号住居跡は、第1号住居跡の北約27ｍの位置にあり、北東約5ｍの位置には第3号住居跡がある。住居跡群の中では最も北の一群である。東西約4ｍ（北壁で測ると約3.8ｍ）、南北3.7ｍの大きさであり、南西コーナーがわずかに調査区の西壁にかかって欠落している。やや東西が長い長方形の住居跡である。住居跡の深さは遺構確認面から約20～30cmである。東壁は短辺であるが、この壁の中央より少し南側に寄った位

第1号住居跡遺物観察表（第8～10図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(10.7)	4.0	4.7	ABEFH5	A	E	70	カマド前	酸化炎焼成
2	坏	10.8	3.9	5.8	AEFGH5	A	B	70	覆土	赤焼き
3	坏		(1.9)	6.3	AH5	A	E	20	覆土	須恵器　外面一部黒化
4	坏	(12.2)	3.8	(4.5)	AEG1	A	B	20	覆土	酸化炎焼成
5	坏	(12.5)	4.2	(5.4)	AEG1	A	B	30	覆土	酸化炎焼成
6	高台付坏	11.7	4.5	6.1	AEH5	A	E	90	覆土	須恵器　歪み大きい
7	高台付坏	(12.0)	4.6	(6.2)	BFH5	A	C	60	覆土	酸化炎焼成　内外面一部黒化
8	高台付坏	11.6	4.7	6.4	BEFH5	A	C	90	カマド	酸化炎焼成　内外面一部黒化
9	高台付坏	(11.6)	3.9	5.8	AEH5	A	K	80	カマド	酸化炎焼成
10	高台付坏	(13.6)	(5.3)	(6.7)	ABE5	A	C	50	カマド	赤焼き　高台剥落
11	高台付坏	(14.9)	6.1	(7.0)	AEFH5	A	C	40	カマド前	酸化炎焼成　高台剥落
12	高台付坏	12.8	5.0	5.3	ABEFH5	A	C	80	覆土	酸化炎焼成　内外面一部黒化
13	高台付坏	(12.7)	4.0	(5.4)	AG2	A	E	40	カマド・床面	酸化炎焼成　高台剥落
14	高台付坏		(3.8)	6.3	BH5	A	E	30	床面	須恵器　底部一部黒化
15	高台付坏		(2.2)	(6.0)	AEFH5	A	B	30	覆土	酸化炎焼成　内外面黒化
16	高台付坏		(2.3)	5.5	EH5	A	B	20	覆土	ほぼ全面黒化
17	高台付坏	(12.6)	5.1	(7.0)	AE1	A	C	30	覆土	酸化炎焼成
18	高台付坏	(13.1)	5.4		ABEH5	A	E	20	覆土	須恵器
19	甕	(21.7)	25.9	7.0	BEGH5	A	B	40	カマド	黒斑あり
20	甕	(21.0)	(15.2)		AEGH5	A	B	20	覆土	胴部推定最大径22.5
21	甕	(21.8)	(11.3)		EFH5	A	C	10	覆土	胴部推定最大径22.6
22	甕	(24.0)	(12.5)		AC5	A	C	10	カマド	
23	甕	(13.1)	(12.2)		EFGH5	A	C	20	覆土	
24	甕		(5.3)	4.9	EGH5	A	B	10	床面	
25	甕	(20.7)	(17.1)		BFGH5	A	B	20	覆土	胴部推定最大径21.4
26	甕	(19.8)	(7.0)		BEH5	A	C	5	覆土	ロクロ整形
27	甕	(22.7)	(18.8)		EFH5	A	B	20	カマド前	ロクロ整形
28	鉢	(23.8)	(8.9)		EGH5	A	B	30	覆土	内面全面、外面一部黒化
29	甕		(24.6)		EGH5	A	C	20	覆土	須恵器　内外面黒化
30	羽釜	(20.7)	(17.8)		EGH5	A	B	20	カマド前	内外面黒化
31	羽釜	(22.5)	(11.5)		AEH5	A	E	5	カマドAソデ	須恵器
32	羽釜		(13.0)		AEH5	A	E	5	覆土	須恵器
33	羽釜		(26.4)		AEGH5	A	E	80	カマド床面	須恵器　歪み大　口径最大24.5　最小20.4
34	置竈	(23.2)	(8.4)		EFH5	A	B	1	覆土	赤焼き
35	置竈		(5.1)		EFH1	A	B	1	床面	赤焼き　炭化物付着

第12図　第２号住居跡



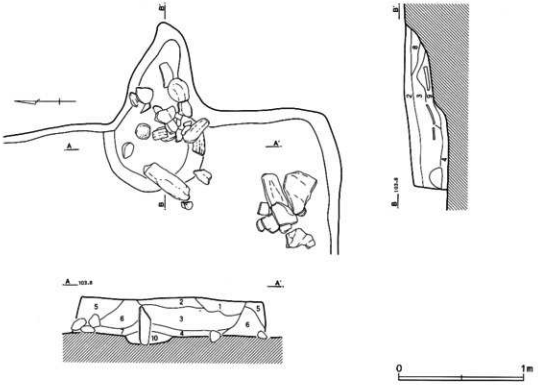
SJ2

1	10YR	4/3	暗褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
2	10YR	4/3	暗褐色　砂質。焼土ブロック・炭化物粒やや多量、小礫多量に含む。
3	10YR	3/3	暗褐色　炭化物粒少量含む。
4	10YR	4/3	暗褐色　砂質。白色粒・焼土粒・炭化物粒多量に含む。

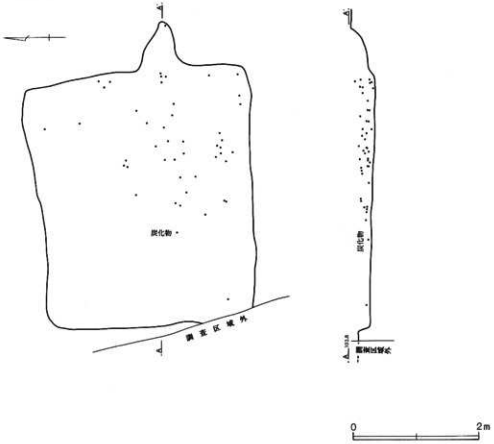
SJ2カマド

1	10YR	3/3	暗褐色　焼土ブロック・炭化物粒やや多く含む。
2	10YR	5/3	にぶい黄褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
3	10YR	5/4	にぶい黄褐色　焼土ブロック・炭化物粒少量含む。
4	10YR	4/4	褐色　焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
5	10YR	4/2	灰黄褐色　炭化物粒少量含む。
6	10YR	5/4	にぶい黄褐色　砂質粘土。焼土粒少量含む。
7	10YR	4/4	褐色　砂質粘土。焼土粒少量含む。
8	10YR	4/4	褐色　焼土ブロック多量、炭化物粒少量含む。
9	10YR	3/3	暗褐色　焼土ブロック多量、炭化物やや多く含む。
10	10YR	4/4	褐色　白色粒少量含む。

0　2m



第13図　第２号住居跡遺物分布



置にカマドが取りついている。カマドは第１号住居跡と異なり、二等辺三角形の形態に近い形態で、東壁に対して直角に近い形で約80cm突出し、片岩を中心とした多くの礫がカマド覆土から出土した。カマドの天井部からソデ部にかけて、これらの礫を芯材にして粘土質土を貼り、カマド本体の形を構築していたと思われる。第１号住居跡カマドＡの場合にも、あまり目立ちはしなかったが、ソデの貼り石のような状態で片岩の礫が出土していた。第２号住居跡のカマドにおいては、礫の下敷きになって、数点の須恵器甕の破片も出土しているが、残りが悪く、礫と共にカマドの芯材とされていたのではないかと思われる。

住居跡南東コーナー付近には大きめの片岩２点と小礫６点以上が組み合わさって敷石状に並べられた状態で出土した。カマド焚き口部推定位置から約80cm離れており、住居跡外空間利用を考えた場合、「棚」想定位置から離れていない南壁際に敷石していることから考えると、何らかの厨房関連施設として、カマドと組み合わせとなる機能を想定すべきであろう。

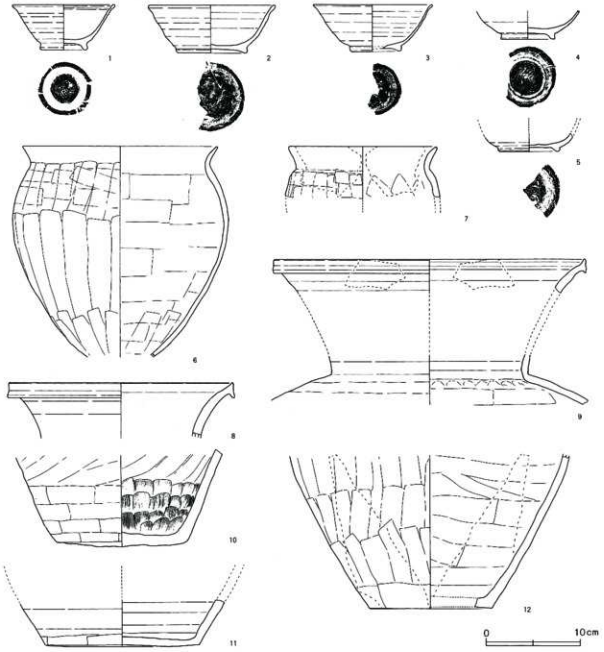
住居跡の主軸方向はＮ－86°－Ｅで、真東に近い。

出土遺物は、住居跡の全面積の９割以上が掘れたにしては少なく、出土位置も散在気味であり、カマド前面にやや集中する傾向があるにすぎない（第13図）。実測図としては坏・椀類４点、土師器甕２点、須恵器甕14点ほどを図示したに留まる（第14・15図）。

坏・椀類は高台付きのもののみであるが、図示できない破片には少数の高台のないものもある。第14図２はやや底径の大きい一見古い様相の土器であるが、その他の土器の器形は第１号住居跡と大差ない。ただし、口唇部の外反の状況や高台の断面が第１号住居跡に比較すると、低く丸い特徴をもつ点、第１号住居跡にはある「足高高台」傾向のものが見当らない点などから考えると、第２号住居跡の坏・椀類の方が少し古い段階のものかもしれない。

これに対して、土師器甕は、第１号住居跡のようなコの字状口縁甕の直接的退化形態の甕ではなく、もっ

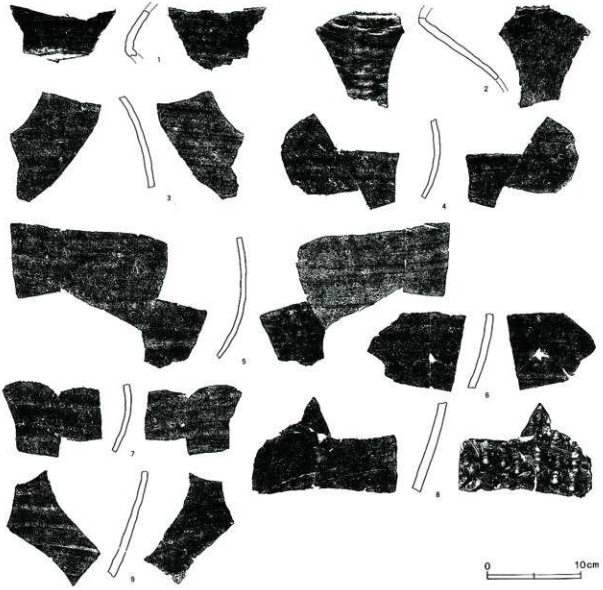
第14図　第２号住居跡出土遺物（１）



と古い８世紀代からの甕の伝統的形態にやや近く、胴部上半部に最大径をもち、丸い上半部から急激につぼまり小さな底部に移行していく胴部に「く」の字状口縁を接合させる形態である。胴部上半のヘラケズリがタテ・ヨコ双方のケズリを大幅に重複させている点から考えると、これは長胴甕系列の土器ではなく、丸胴甕系列の土器が変化した形態にあたるかもしれない。よりよく残存している第14図６で観察する限り、胴部は３段にケズられており、調整手法上は古くからの土器作りを踏襲しているようである。

須恵器の甕は、前述のようにカマド構築材にされていたものが相当数あるので、住居が機能していた時期の遺物とはいえないかもしれない。やや大きな平底をもち、肩をもつ器形になる。頸部がやや長めになると考えてよければ、奈良時代末頃から平安時代前半期に流行する中型の甕の形態としてよいであろうが、土器として実際に使われていた時期は、住居跡の時期より古い時期であったかもしれない。調整としては、ロク

第15図　第２号住居跡出土遺物（２）



ロナデを最終的な調整としているものがほとんどであり、タタキ目のような痕跡が残る土器が見当らない。土器の大きさがやや大きめなためか、内面に指押さえが多用されており、外型利用の可能性もある。第14図10のように、甕胴下半部内面に指先あるいは指先に近い形で器面に当たる工具で強めにナデつけたような痕跡（指先ならば布使用による繊維の凹凸のためについた擦痕）もある。この痕跡も一種の指頭押圧の結果かもしれず、胴部下半が比較的まっすぐでゆるく開いていく形態であることと、土器製作上の手法のあり方をもう少し関連づけて考える必要があるかもしれない。胴部下端にヘラケズリが施されているものと、ロクロナデだけのものがある。内面もナデが丁寧に行われているため指押さえ痕が消えているものと、凹凸自体はよく残っているものとがある。底面も手持ちヘラケズリが行われているが、さらにナデで表面仕上げしようとしている個体もある。拓影図で示したものは、１・２が赤灰褐色、８が部分的に赤味のある黒灰色、それ以外は青黒灰色であるが、１・２、３・５、４・７は同一個体の可能性がある。１・２はカマド内、その他はカマド前の覆土に散在していたものである。

相対的には第１号住居跡の土器群よりわずかに古い段階を示している可能性がある。

第２号住居跡遺物観察表（第14図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	高台付坏	(11.0)	4.8	5.1	BEH5	A	F	40	カマド	須恵器
2	高台付坏	13.7	5.1	7.6	CDH5	A	C	70	覆土	酸化炎焼成　内外面一部黒化
3	高台付坏	12.8	5.0	5.5	EFGH5	A	C	70	カマド	酸化炎焼成
4	高台付坏		(3.1)	5.8	AEH5	A	E	30	覆土	酸化炎焼成　内面重ね焼きによる変色
5	高台付坏		(2.0)	(6.6)	BFH5	A	K	10	覆土	須恵器
6	甕	20.9	(22.3)		ABEH5	A	B	30	カマド SJ3内土層	
7	甕	(15.8)	(5.3)		ABEH5	A	B	5	カマド	
8	甕	(24.3)	(5.8)		AEFH5	A	H	5	覆土	須恵器
9	甕	(33.5)	(15.4)		BEH5	A	B	3	カマド	須恵器
10	甕		(10.2)	14.1	ADEH5	A	F	5	覆土	須恵器
11	甕		(5.0)	16.4	EH5	A	H	5	覆土	須恵器
12	甕		(16.3)	(13.1)	BDEH5	A	H	5	カマド	須恵器

第３号住居跡（第16～21図）

第３号住居跡は、第２号住居跡の北東約５ｍの位置にあり、今回の調査区では最も北に位置する住居跡である。道路幅の調査区であるため、遺跡全体として最北の住居跡かどうか定かではないが、Ａ区の遺構確認面に河床堆積物が散在しており、この辺に古代の川の流れの一部が本来所在していたかもしれないとすれば、住居群の主体が存在する可能性が高い区域は、Ｂ区の南北90ｍくらいの範囲を中心としていることになる。住居跡の北壁全部と西壁・東壁の北寄りの部分が調査区東壁の外に出てしまっており、正確な大きさがわからないが、東西4.1ｍを測り、西壁の南北の残存部の長さが約5.5ｍであることから、長辺が６ｍをわずかに超えない大きさの隅丸長方形に近い台形を呈する。遺構確認面からの住居床面までの深さは最大45cmで、かなり深い住居跡である。住居跡の主軸方向は、Ｓ－61.5°－Ｅで東南東である。

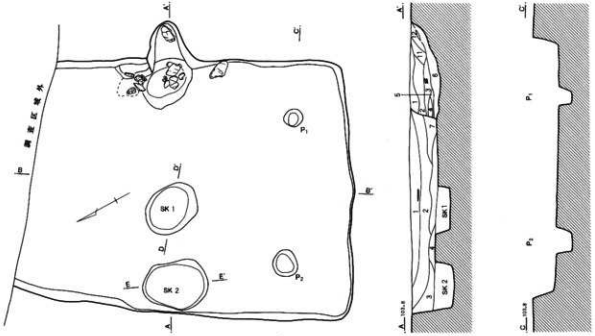
長辺である東壁の中央付近にカマドが付設されており、壁からほぼ直角の方向に約60cm突出している。カマドは左ソデの一部だけが残っており、左ソデ内側面にあたる位置、右ソデ外側、煙道出口、天井部下にあたる位置に片岩を主体とする礫がやや多く確認されている。第２号住居跡と同じように片岩の礫を芯材にしてカマドを構築していたと見てよいであろう。

カマドに相対する位置の床面の中央よりやや西寄りと西壁際には長径95cm、長径1.06ｍの２基の土壙がある。土壙そのもののホリカタは垂直に近い急な掘り込みになっており、床面からの深さも25cm、30cmの程度であるので、床下土壙と考えてよいであろう。

南壁寄りの床面上には、柱穴と考えられるピットが２本分確認されている。東側をP_1、西側をP_2とする。P_1は、住居南東コーナーの対角方向の内側約１ｍにあり、東壁からは75cm、南壁からは72cm離れた位置である。長径32cm、深さ20cmを測る。P_2は、住居南西コーナーの対角方向内側1.05ｍにあり、西壁から70cm、南壁から90cm離れた位置である。長径44cm、深さ25cmを測る。この２本の柱穴の芯々距離は約2.3ｍである。

この住居跡の出土遺物は、２号住居跡よりはやや多めであるが、やはりかなり散在的な出土状態である。出土位置の傾向としてはカマド周辺と西壁から約１ｍ程度離れた位置に弱い集中が認められはするが、覆土が徐々に住居掘り込み内に流れ込むのに呼応して流れ込んでいるような印象があり、住居跡の時期を直接示す土器は数少ないと思われる。しかし、遺物の散在の度合いから考えると、遺物の大半は住居廃絶以後に住居周辺に廃棄されていたものと考えることができ、間接的にはこの住居跡の時期を判別する材料として利用することはできると考えられる。もう一つ付け加えておくと、第２号住居跡の土器とこの住居跡の土器が接合しているものがいくつか認められており、住居構築の時期には時間差があるかもしれないが、それほど時

第16図　第３号住居跡

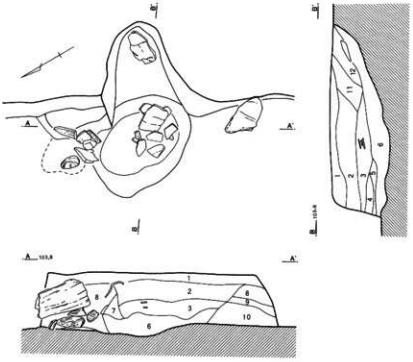


間差をおかずに２軒とも放棄されたと考えてよく、同時存在の期間をもつ住居跡であると判断しておきたい。

遺物について記述する。実測図にできた土師器・須恵器類は32点であるが、他に拓本のとれた須恵器片13点、石製紡錘車１点、管状土錘１点、鉄滓３点がある。

図示できたものの大半は坏・椀類である。やや小振りで高台が付かないものと高台が付くやや大きめの椀とに分かれることは第１・２号住居跡と同様で、第３号住居跡も前二者との間にそれほど大きな時間差がないことは明らかである。ただし、坏体部から口縁部への立ち上がりの形態に内彎するものと直線的なものがあり、後者が少ないとはいえ、坏・椀双方に認められることは注目しておく必要がある。ただし、口径・底径・器高の比率にバリエーションが大きいことは第１号住居跡の一群と共通する現象である。底部はロクロ回転糸切り離しであるが、高台貼り付け時のナデつけで底面の痕跡が見えなくなってしまっているものも多い。高台には「足高高台」の傾向のあるものもあるが、

第17図　第３号住居跡カマド

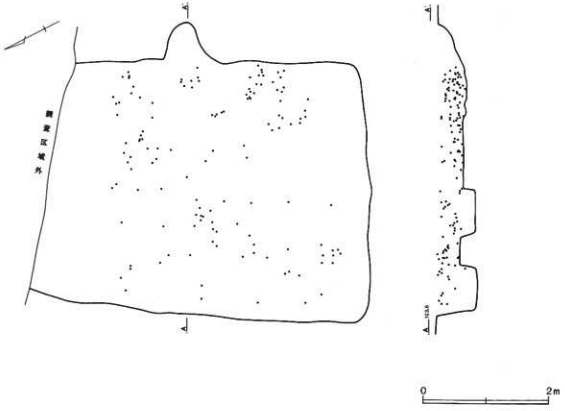


ＳＪ３カマド

1	10YR	3/4	暗褐色　焼土ブロック含む。
2	10YR	4/3	にぶい黄褐色　焼土粒・炭化物少量粒含む。
3	10YR	3/2	黒褐色　焼土ブロック・炭化物ブロック多量に含む。
4	10YR	5/1	褐灰色　粘土と焼土の互層。
5	10YR	3/2	黒褐色　炭化物粒少量含む。
6	10YR	4/3	にぶい黄褐色　砂質土層。底面は被熱。
7	10YR	5/4	にぶい黄褐色　砂質粘土
8	10YR	3/3	暗褐色　炭化物粒若干含む。
9	10YR	5/1	褐灰色　焼土粒・炭化物粒と粘土層の互層。
10	10YR	5/4	にぶい黄褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。砂質粘土。
11	10YR	3/3	暗褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
12	10YR	3/4	暗褐色　焼土粒鋤状に、炭化物粒少量含む。

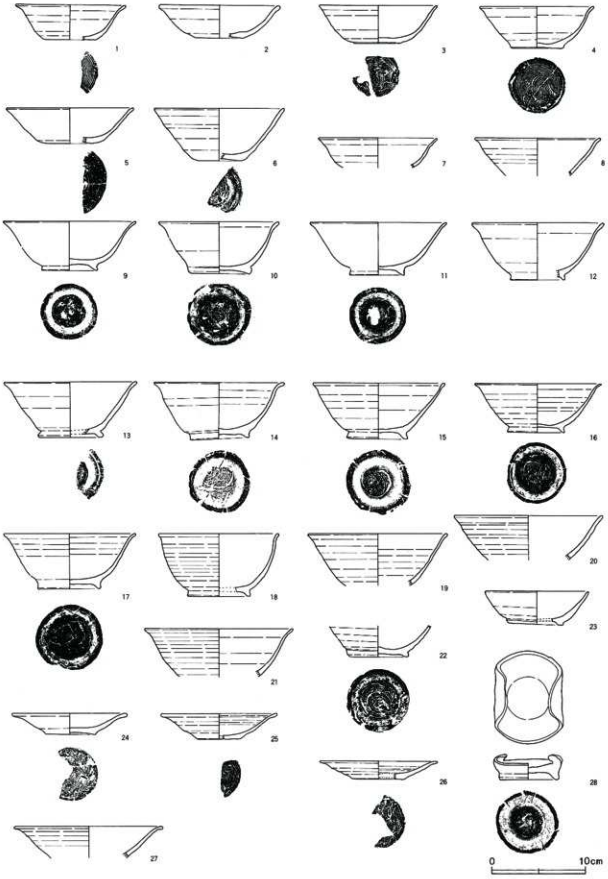
0　1m

第18図　第３号住居跡遺物分布

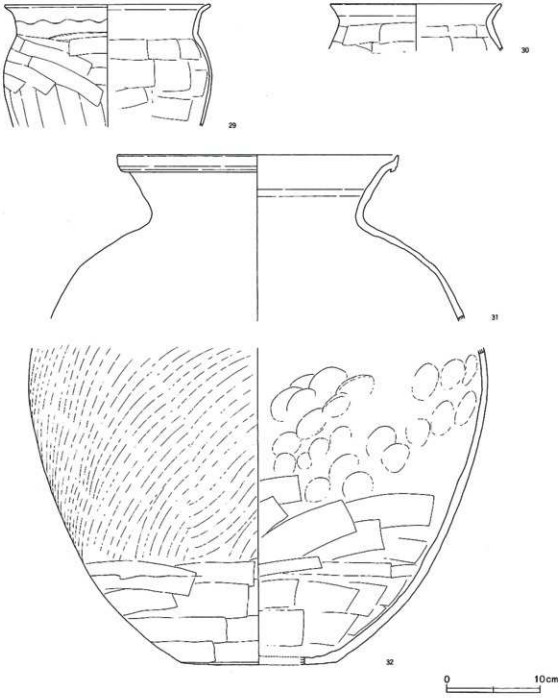


0　2m

第19図　第３号住居跡出土遺物（１）



第20図　第３号住居跡出土遺物（２）



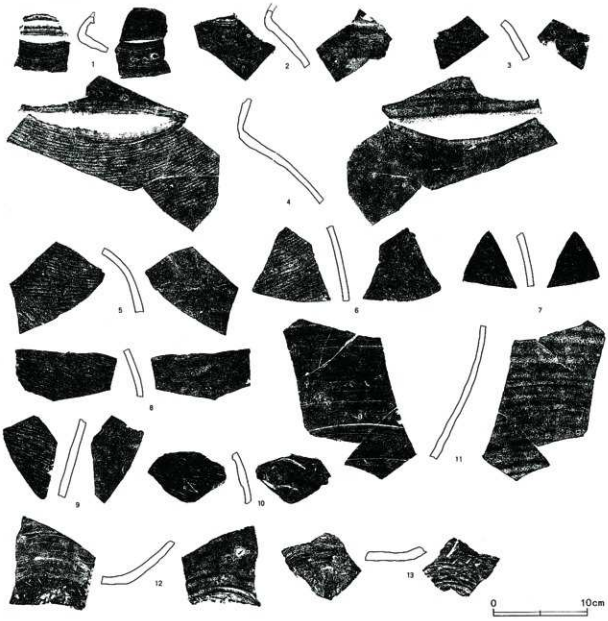
ほとんどは低い丸い形態を示しており、第２号住居跡の様相に近い。

また、蓋を兼用すると考えられる皿が一定量あり、「施釉陶器写し」と考えられる耳皿もあり、これの祖型から年代推定することも考慮すべきであろう。

土師器甕は２点図示したが、破片は一定量あり、口縁部形態は第20図29に類似するコの字状口縁の変形直後の形態が主体である。30の甕は口縁部が「く」の字を呈する形態で、長胴甕系列でなく丸胴傾向の甕であろう。

須恵器甕はやや大型の口縁部から胴部上位の残るもの（第20図31）があり、第２号住居跡覆土の出土土器と第３号住居跡カマド・住居内土壙・覆土出土土器が接合している。この甕はタタキ目が目立たず、胴部全

第21図　第３号住居跡出土遺物（３）



面をよくナデている。口縁部は上下に肥厚し、外側に面を作るが、この面の方向はやや下向き傾向である。わずかに青味かかった灰白色を呈する。

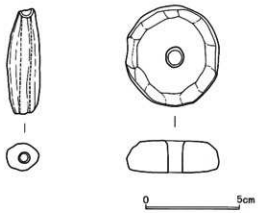
第20図32の甕もやや大きい甕で、外面青黒灰色、内面セピア色に近い色調で、外面は斜め方向に指で大きくナデ上げるような調整をし、内面は指押さえを主体としながら、その後ヘラをやや多用した調整を施している。外型整形をした後ヘラ調整したものと思われる。胴部はやや間延びした丸胴で、平底を呈する。

拓影図で紹介した土器もほとんどが中型の甕と思われる。ロクロナデを主体とし、指押さえを併用するものもあるが、平行タタキ目の残る土器もある程度は出土している。

石製紡錘車はやや黒ずんでいるが、よくミガキ込まれている。上面は平らであるが、下面には面取りをして斜面・側面を調整した痕跡がある。最大径5.2㎝、厚さ1.7㎝、重さ66.96ｇ。硬質砂岩製か。

管状土錘は、通常河川沿いに立地する奈良・平安時代集落跡からは多く出土する遺物であるが、本遺跡からはこの１点のみである。中央が太く、最大径1.8㎝、長さ5.3㎝で、両端が細くなる形態はごく一般的なものである。土師器と同様の焼きであり、焼成良好。橙

第22図　第３号住居跡出土遺物（４）



褐色。重さ16.55ｇ。

鉄滓は３点のうち表面が土質のもの１点、表面が通常の銹状をしているものが２点ある。前者は覆土、後者はカマドと覆土からそれぞれ出土している。ここでは前者を１、後者のうちカマド出土のものを２、覆土出土のものを３として記述する。

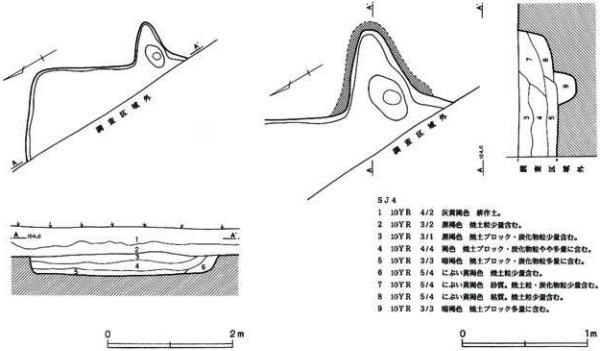
まず、カマドから出土した２については、片側がやや丸くなっており、その反対側がわずかに凹面になっている。また、高熱で溶けた鉄が還元されて黒くなった部分をもち、そのまま冷えて凝固したと推測できる。つまり、２は坩堝内に少量残っていた銑鉄が冷えて固まった後に捨てられたものである、ということが推定される。これが正しければ椀形の鍛冶滓ということになるであろう。

覆土出土のもののうち、銹状の３は表面の数ヶ所に木質の小さい板状のものが貼り付いた痕跡が見える。しかも多面体状の形態をしており、意図的に打ち壊されたもののように見える。これは製鉄炉を破壊して取り出した、燃料などの不純物を多量に含んだ鉄滓の可能性があると思われる。

第３号住居跡遺物観察表（第19・20図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(11.8)	3.7	(5.5)	EH1	A	H	20	覆土	須恵器
2	坏	(12.9)	3.5	(5.0)	AEH1	A	H	20	覆土	須恵器
3	坏	(12.6)	4.0	5.2	EH5	A	G	30	覆土	須恵器　一部赤化
4	坏	12.2	4.5	5.7	DEH5	A	H	85	カマド　覆土	須恵器
5	坏	(13.7)	3.8	(4.4)	AEGH5	A	B	20	覆土	赤焼き
6	坏	(14.0)	5.6	(4.4)	AEH5	A	E	20	覆土	酸化炎焼成
7	坏	(12.7)	(3.2)		BEF1	A	E	30	覆土	酸化炎焼成
8	坏	(13.4)	(4.0)		DEH5	A	E	20	覆土	酸化炎焼成
9	高台付坏	(14.3)	5.2	6.0	EGH5	A	B	30	覆土	赤焼き　内面黒化
10	高台付坏	(12.9)	5.5	6.7	EGH5	A	E	40	覆土	酸化炎焼成　外面一部黒化
11	高台付坏	(14.7)	5.6	5.9	AEG5	A	C	30	覆土	酸化炎焼成　底部中央に小孔
12	高台付坏	(14.1)	6.0	(5.9)	AE5	A	C	20	覆土	酸化炎焼成
13	高台付坏	(14.3)	5.8	(7.0)	ADEGH5	A	B	40	覆土	赤焼き
14	高台付坏	14.0	6.3	6.4	ACEH5	A	B	90	覆土	赤焼き
15	高台付坏	14.1	5.9	6.6	EG5	A	C	40	覆土	酸化炎焼成　内外面黒化
16	高台付坏	13.5	5.2	6.1	ADEGH5	A	C	100	覆土	酸化炎焼成
17	高台付坏	(14.1)	5.8	6.7	AEH5	A	B	30	床下土壙	赤焼き
18	高台付坏	(12.9)	6.6	(6.8)	FH1	A	E	20	覆土	須恵器
19	高台付坏	(15.0)	(5.5)		BCEH5	A	E	20	覆土	須恵器
20	高台付坏	(15.8)	(4.7)		ADEH5	A	G	10	P1	須恵器
21	高台付坏	(15.9)	(5.0)		EH5	A	G	20	覆土	須恵器
22	高台付坏		(3.3)	6.7	AEH5	A	G	25	覆土	須恵器
23	高台付坏	11.0	3.6	6.1	AEGH5	A	B	50	覆土	赤焼き
24	皿	(12.4)	2.2	5.4	BCEH5	A	I	40	覆土	酸化炎焼成　内外面一部黒化
25	皿	(12.4)	2.7	(4.7)	AEH1	A	F	25	覆土	須恵器
26	皿	(12.6)	1.9	5.6	AEH5	A	G	30	覆土	須恵器
27	皿	(16.0)	(3.3)		AEG5	A	F	10	覆土	須恵器
28	耳皿	9.8	2.7	6.4	ABCEG5	A	C	95	覆土	酸化炎焼成　内外面一部黒化
29	甕	(22.2)	(12.9)		ABCH5	A	C	5	覆土	
30	甕	(18.3)	(5.0)		ABC5	A	C	5	覆土	
31	甕	30.1	(17.5)		AEGH5	A	J	5	カマド　床下土壙２	須恵器
32	甕		(33.4)	(16.6)	ADEH5	A	G	10	覆土	須恵器

第23図　第４号住居跡



土質の１は、丸い瘤状に土が付着しており、銹のような形状は完全に覆われてしまい、土の塊のように見える。１はおそらく鉄よりも土壌の方が圧倒的に多いと思われ、製鉄炉の廃滓口から流れ出たノロに土がこびりついた状況を示すものと推定される。

以上の鉄滓は、いずれも単独で出土したことが確認されており、鍛造剥片などは伴っていなかった。つま

第４号住居跡（第22図）

第４号住居跡は、第１号住居跡の北８ｍ、第２号住居跡の南15ｍに位置する。カマドを含む東壁の一部と北東コーナー部及び北壁の一部を検出したにすぎず、東壁の長さ約2.4ｍ、北壁の長さ約1.5ｍが調査区内に入っている。仮に、長辺約４ｍ、短辺約３ｍ程度の隅丸長方形の住居跡と考えた場合は、住居跡全体の約２割くらいが確認されたことになる。

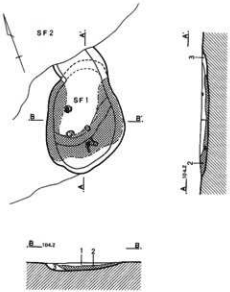
住居跡の主軸方向は、この確認状況では計測できにくいが、東壁に直交する方向と仮定すれば、Ｓ－62°－Ｅとなり、東南東方向で第３号住居跡の方向性とほぼ同じとなる。遺構確認面から住居床面までの深さは最大27cmを測り、他の住居跡と同様の深さである。

カマドは、おそらくは東壁中央部付近に取り付いており、鉄原料の一部らしきものを出土してはいるものの、今回の調査区の範囲においては小鍛冶は行われていなかったことになる。ちなみに、１は最大径8.3cm、厚み3.8cm、重量177.86ｇ、２は最大径6.9cm、厚み2.0cm、重量87.0ｇ、３は最大径7.7cm、厚み3.9cm、重量244.51ｇである。

いると考えられるが、壁からまっすぐ突出してはおらず、やや北に振れた方向を向いている。カマド煙道先端部からカマドの左側の壁までの長さ約75cmであるが、突出する方向に沿って測ると70cm弱となる。煙道部の壁面は被熱のため赤化しており、遺構確認面での観察の結果では、壁面から水平方向に６cm程度の幅で土が赤く変色しているのが確認できた。また、カマドの左右の住居壁面はわずかに段違いになっており、幅20cm程度の棚状施設が存在する可能性もある。カマド底面には長径40cm、深さ16cmのピット状のホリカタがあり、それを埋め戻してカマド底面を造成していた。

出土遺物はごくわずかであり、ほとんどが土師器甕の破片であった。粉々に壊れているものがほとんどで、

第24図　第１号土器焼成遺構



(2)　土器焼成遺構・土器焼成関連遺構

平安時代の竪穴住居跡群が確認されたB区の北半部に対して、南半部は土壙・柱穴その他の遺構が密に分布する区域となっている。その土壙群・柱穴群分布域の最も北側に、ここで土器焼成遺構及び土器焼成関連遺構と称した土器生産に関わると思われる遺構群がある。第Ⅲ章でも記したように、確実に土器を焼成した遺構は第１号土器焼成遺構の１基に限られるが、土器

第１号土器焼成遺構（第23・24図）

第１号土器焼成遺構は、第１号住居跡の南約11ｍの位置に所在していた。遺構確認当初は、この遺構の付近には焼土塊・焼土粒・炭化物が集中しており、この遺構を含めて合計９基の土器焼成遺構が径7.5ｍほどの区域の中に集中していると認識して精査していた。しかしながら、調査が進行すると、上層の焼土分布以外に掘り下げた下層においても土器焼成面を想定できるような被熱の痕跡や焼土層・炭化物層が繰り返し検出されることになった。そこで、元来はこれが一つの

図示することは不可能であるが、特徴的な破片を観察して考えられることは、口縁部形態が第１号住居跡に近い甕が含まれており、ロクロ調整でヘラケズリも伴う灰色っぽい硬い焼きの甕乃至羽釜の破片も含まれているということである。第１号住居跡に近い土器様相を想定してよいのではないかと思われる。

ところで、竪穴住居跡の項目の末尾であるので、住居跡群から考えられることを若干整理しておこう。

各住居跡の間隔は、北から４ｍ、16ｍ、８ｍとなっているが、この距離は住居跡の関係を考えるには示唆的である。距離の近接した住居跡はより深い関係にあるといえる第一の条件である。

土器の出土状況や様相から第２号住居跡と第３号住居跡の組合せ、第１号住居跡と第４号住居跡の組合せの２組の住居跡群として把握することもできる。これが第二の条件である。

さらに、前述の土器の個別的分析からも２住・３住ペアの方が１住・４住ペアよりもわずかに古い時期になる可能性があることが指摘できる。

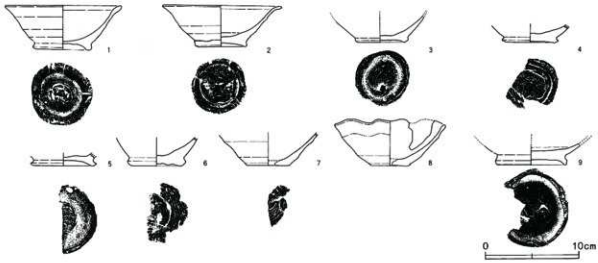
焼成関連遺構とした大きな穴でも土器焼成が繰り返された可能性があり、さらに後述するが、古代に属すると思われる土壙のほとんどが多量の焼土を含む土を覆土としていた。

以下に、本遺跡での土器生産の様相を模索しながら記述してみたい。

大きな土壙であり、最も新しい段階で形成されて、痕跡としてもしっかり残っていた第１号土器焼成遺構のみを土器焼成遺構として認識することにした。土壙全体については、次項で土器焼成関連遺構として記述することにする。

第１号土器焼成遺構は、楕円形の平面形態をもち、浅い皿状の掘り込みを呈する。長径1.7ｍ、短径1.3ｍ、深さ13cmを測る。掘り込み底面には、U字形を呈する被熱面があり、最大10cmの厚みのある焼土層がその上

第25図　第１号土器焼成遺構出土遺物



第１号土器焼成遺構遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	高台付坏	(12.6)	4.7	6.3	AEGH5	A	C	40	床面	赤焼き
2	高台付坏	12.8	4.5	5.6	AEGH5	A	B	70	床面	赤焼き　黒斑あり
3	高台付坏		(2.7)	5.6	AEGH5	A	B	20	床面	赤焼き　内外面黒化
4	高台付坏		(2.0)	(6.0)	BG1	A	F	20	床面	須恵器　内外面黒化
5	高台付坏		(1.4)	(7.0)	AEGH1	A	F	10	床下拡張	須恵器
6	高台付坏		(3.0)	(6.2)	AEGH1	A	C	20	床面	酸化炎焼成
7	高台付坏		(3.5)	(4.5)	EGH1	A	H	10	床下拡張	須恵器　歪み大きい
8	坏	(11.9)	5.0	(4.4)	AEH2	A	K	30	床下拡張　SF6	須恵器
9	皿		(2.3)	7.6	GH1	A	J	20	床面	灰釉陶器

に堆積し、さらに炭化物を多量に含む５～７cmの厚みの暗褐色土層で埋まっていた。完形に近い坏２点、焼き台に利用されたと思われる土師器甕片・片岩の礫が掘り込み底面に接して出土した。

この遺構を調査し終わってから、その下層がどうなっているか確かめるために掘り下げたところ、遺構底面から20～30cm下まで下げたところで、本当の地山に到達した。つまり、当初の掘り込みを20～30cm埋め戻してからこの土器焼成遺構が形成されたことになる。これ以上は土器焼成関連遺構の項で述べるが、この遺構自体はそれだけで完結しているのではなく、土器焼成関連遺構全体の展開の中で把握する必要がある。

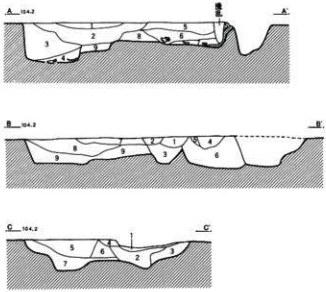
出土遺物は９点図示したが、このうち、この遺構で焼成されたと考えられるのは、遺構底面に取り残されていた第24図１・２の坏２点であり、それ以外は遺構廃絶時に流れ込んだものであろう。１と２はいずれも土師質に近い赤焼きであるが、ロクロで調整されており、高台の作りが丸く低い。口縁部は大きく外反し、やや丸い仕上げの口唇部をもつ。底面は高台貼り付け時のナデにより底部切り離し技法の痕跡が不明であるが、この２点以外の土器の底面の痕跡から判断する限りおそらくロクロ回転糸切り離しであろう。他の土器もおおかた高台付坏であるが、焼きがあまく、器壁が厚く、高台も丸く低く作られたものがほとんどである。第24図７・８は高台の付かない坏であるが、大きく歪んでおり、製品として使用されたものとは思われない。また、10は白っぽい胎土で高台の作りもよく、灰釉陶器であろう。１・２以外のすべての破片の残存率は低く、焼き台に二次利用された後に、廃棄されたものと考えてよいだろう。

第26図　土器焼成関連遺構

土器焼成関連遺構（第25～30図）

土器焼成関連遺構と呼称した大土壙は、第１号住居跡の南約５ｍの位置を最北端とし、第１号土器焼成遺構の位置を最南端として、南北7.4ｍ、東西6.6ｍを測る。形態は形容しがたい不整形であるが、長方形を二つ斜めに接合したような形態であり、銃身の短い拳銃のような形態と形容するのが表現としては最も近いと思われる。当初この大土壙に相当する範囲に土器焼成遺構９基を想定して調査に着手した。想定した９基の形態と大きさは第27図に模式的な平面図として図示してみた。想定された土器焼成遺構の個別の形態や大きさはやや幅があり、長径1.3～2.4ｍくらいで、倒卵形や楕円形と見ていた。第２・４・５号土器焼成遺構の土層断面、第７・８・９号土器焼成遺構の土層断面を確認することによって、実は個別の土器焼成遺構と考

第27図　土器焼成関連遺構土層断面図



A－A'

1　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック多量、炭化物粒少量含む。
2　10YR　2/3　黒褐色　焼土粒多量、炭化物粒・粘土ブロック少量含む。
3　10YR　4/3　にぶい黄褐色　焼土粒・炭化物粒・白色粘土ブロック少量含む。
4　10YR　5/6　黄褐色　粘質。焼土ブロック・炭化物粒多量、白色粘土ブロック少量含む。
5　10YR　2/3　黒褐色　炭化物粒多量、焼土ブロック少量含む。
6　10YR　4/3　にぶい黄褐色　焼土ブロック・炭化物粒少量含む。
7　10YR　5/6　黄褐色　焼土ブロック多量、炭化物少量含む。下面は被熱のため赤色化。
8　10YR　4/3　にぶい黄褐色　粘質。焼土粒・炭化物粒少量含む。
9　10YR　5/6　黄褐色　粘質。炭化物粒少量含む。

B－B'

1　10YR　3/2　黒褐色　焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
2　10YR　4/2　灰黄褐色　炭化物粒多量、焼土粒少量含む。
3　10YR　3/3　暗褐色　焼土粒・炭化物粒・小礫少量含む。
4　10YR　4/3　にぶい黄褐色　焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
5　10YR　4/4　褐色　焼土ブロック・炭化物粒少量含む。
6　10YR　3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物粒・小礫少量含む。
7　10YR　4/4　褐色　焼土粒・炭化物粒多量に含む。
8　10YR　5/4　にぶい黄褐色　炭化物粒・小礫少量含む。
9　10YR　3/4　暗褐色　炭化物粒・小礫少量含む。

0　2m

C－C'

1　10YR　6/6　明黄褐色　焼土層。炭化物粒やや多く含む。パリパリに焼けている。
2　10YR　3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物粒・小礫やや多く含む。黄褐色土島状に含む。
3　10YR　5/6　黄褐色　粘質。
4　10YR　3/3　暗褐色　焼土粒・炭化物粒・小礫やや多く含む。
5　10YR　2/3　黒褐色　焼土粒・炭化物粒やや多く、小礫多量に含む。
6　10YR　3/4　暗褐色　焼土粒・炭化物粒やや多く、小礫少量含む。
7　10YR　4/4　褐色　粘質。小礫ほとんど含まない。

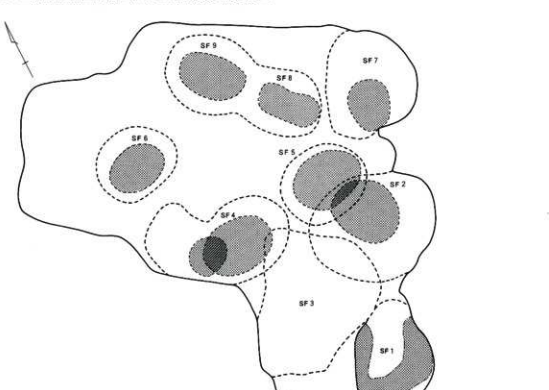
えていた部分は明確な形態が確定できる掘り込みにはなっておらず、地山面まで掘り下げると最大60cmまで掘り下がってしまい、底面も凹凸の多い大きな掘り込みになることが判明した。しかも、径2mに満たない焼土層のまとまりが、垂直方向も含めて10か所以上になってしまうことも判明した。遺構の実態としては、土器製作の材料とすべき土を採掘した穴（土器製作用土採掘坑）が当初の姿であり、徐々に埋まっていきながら、土器焼成遺構に二次的に利用されたらしい。このためあいまいな掘り込みや焼土層の重層化という現象が認められることになったと思われる。結果的には、遺構確認面付近でもあいまいな数か所の土器焼成遺構があった可能性があるが、各焼成遺構想定区域の下層であっても中世の遺物が混入している部分があり、中世期に至っても、この大土壙が埋まりきっておらず、一定の大きさの「ゴミ穴」のような状態になっていたのかもしれない。

したがって、当初想定された土器焼成遺構のうち、実際に土器を焼成した可能性が高いものは4か所程度になってしまう。そのかわり、ほぼ同じ4か所くらいが下層の「土器焼成遺構」になるかもしれない。そこで、当初の9か所の「土器焼成遺構」のうち8か所は保留し、全体で土器焼成関連遺構として認識することにした。ただし、土器類が多く出土しており、上層の「土器焼成遺構」に付随すると想定して取り上げたものが多いので、これらの遺構番号を土器の相対的位置の把握のために利用することとし、第28～30図の遺物実測図も「土器焼成遺構」の番号ごとの表示を加えておいた。第27図と対応させて土器の出土位置と型式学的特徴の検討に生かしたいと思う。

さて遺物であるが、支脚状土製品を含め43点を図示した。ほとんどが坏・椀類であるが、「第2・3号土器焼成遺構」、「第4号土器焼成遺構」、「第5号土器焼成遺構」、「第7号土器焼成遺構」のそれぞれの区域には土師器甕の出土も確認されている。

総体的には、高台付の椀と高台なしの坏は同じくら

第28図　土器焼成関連遺構における土器焼成遺構想定図



いの量が出土している。高台なしの坏は土師質のものと酸化炎焼成のものがあり、須恵質の焼きになっているものはほとんどない。体部から口縁部への立ち上がりも第1号住居跡の坏に類似する形態と考えてよく、体部全体は内彎、口唇部はゆるく外反する。第3号住居跡の坏のように外反度のややきつい土器ではない。また、ごく少数ではあるが体部がやや直線的に立ち上がる土器もある。

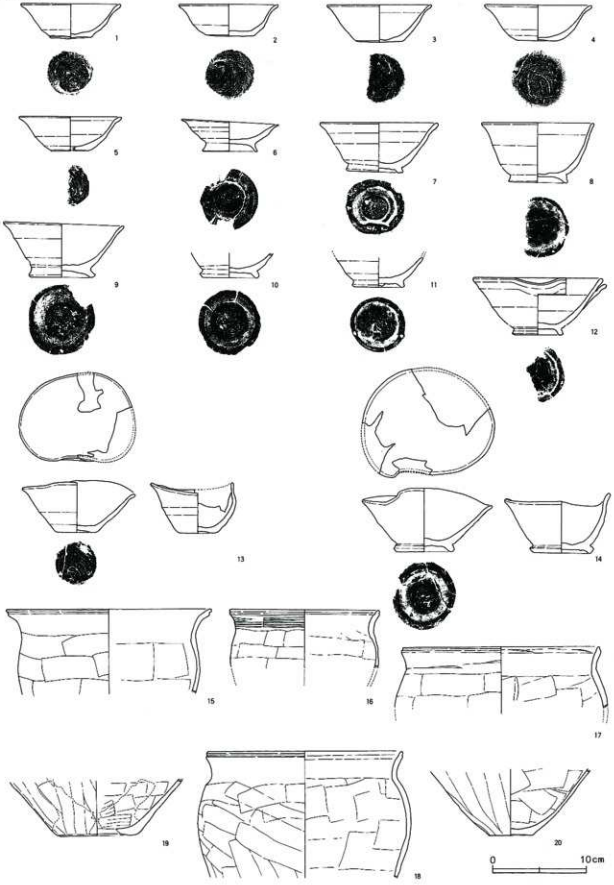
高台付の椀は、逆に須恵質のものが主体で、歪んでいる個体も多かった。図示に耐えるものは歪みの少ないものであることが多かったので、図示したものが主体的傾向を示すと錯覚されそうであるが、小さな破片まで見る限りでは、歪んだものの方がやや多いという印象である。この器種の場合は、直線的立ち上がり・「足高高台」傾向の椀が主体で、内彎・低高台は少数派となる。第1号住居跡と第3号住居跡の過渡的様相であろうか。また、「第2・3号土器焼成遺構」の部分から出土した土器には、「足高高台」の小皿タイプのものもある。

土師器甕は多くはなかったが、第1号住居跡出土の口唇部にゆるい面と沈線をもつタイプと、第3号住居跡出土のコの字状口縁が形骸化したタイプの両者があり、「第2・3号土器焼成遺構」部分では両者ともに出土している。ただし、第1号住居跡に見られたロクロ整形の甕はなく、この点に関しても第1号住居跡と第3号住居跡の過渡的様相と考えることができる。

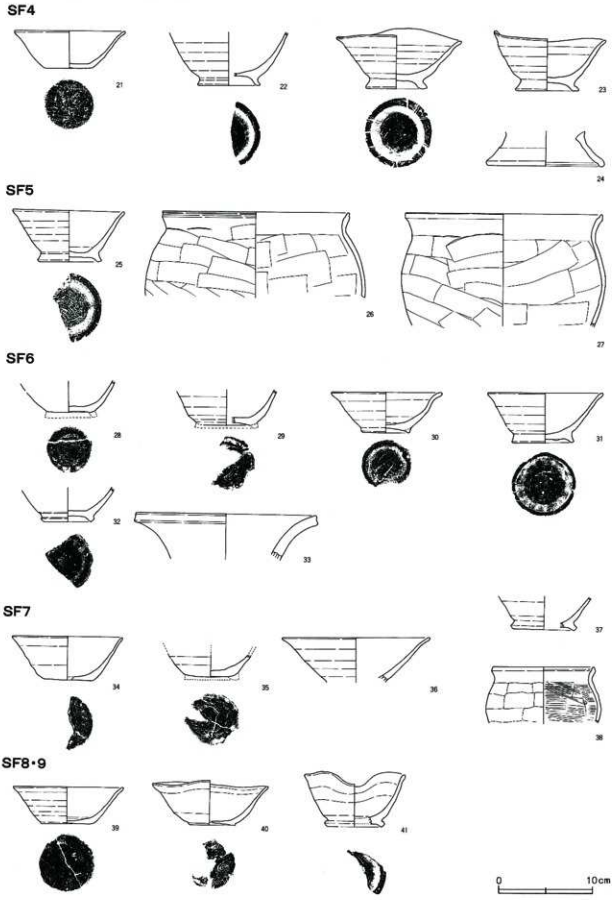
最後に支脚状土製品を取り上げておく。この土製品は「第2号土器焼成遺構」の下層とした部分から出土したものである。断面六角形の柱状のものが縦半分に割れてしまって、高さも8㎝足らずの部分で割れているが、割れ口はそれほど新しいものではなく、住居跡のカマド等で使われていたものが破損して廃棄されたものかもしれないが、土器焼成遺構の焼き台に転用されていたことも考慮すべきだろう。断面で内部の状態

第29図　土器焼成関連遺構出土遺物（1）

SF2・3



第30図　土器焼成関連遺構出土遺物（2）



土器焼成関連遺構遺物観察表（第29・30図）

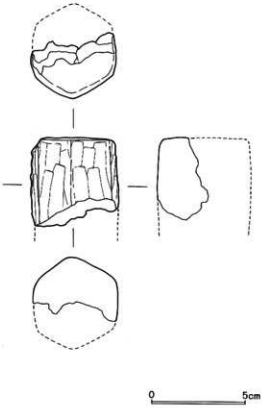
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	10.7	4.0	4.5	EGH5	A	B	100	SF2上層	赤焼き　内外面一部黒化　黒斑あり
2	坏	10.7	3.4	5.0	AEGH5	A	B	100	SF2上層	赤焼き　外面一部黒化　黒斑あり
3	坏	(11.2)	3.9	5.0	AEGH5	A	E	40	SF2	酸化炎焼成　内外面一部黒化
4	坏	(11.4)	3.8	4.0	AEGH5	A	C	50	SF2	酸化炎焼成　外面一部黒化
5	坏	11.0	3.6	(4.0)	AEGH5	A	B	60	SF2上層	赤焼き　外面黒化
6	高台付坏	(10.5)	3.4	5.9	EGH2	A	C	70	SF2	酸化炎焼成　黒斑あり
7	高台付坏	(12.6)	5.4	6.1	EGH5	A	E	70	SF2	酸化炎焼成　黒斑あり
8	高台付坏	(12.0)	6.4	6.3	ACG1	A	E	40	SF2・3	須恵器　底部黒化
9	高台付坏	(13.0)	5.8	7.2	AEG5	A	B	60	SF2　SF5	酸化炎焼成　黒斑あり
10	高台付坏		(2.6)	6.4	AEG5	A	C	30	SF2	酸化炎焼成　黒斑あり
11	高台付坏		(3.1)	5.6	EG5	A	E	30	SF2	酸化炎焼成
12	高台付坏	13.8	6.0	(5.4)	AEH5	A	E	50	SF2・3	須恵器　片口
13	坏		5.5	4.2	AEH5	A	E	80	SF2・3　SF5	須恵器　歪み大　最大口径12.2　最小口径8.8
14	高台付坏		6.7	6.8	DFH5	A	E	70	SF2・3	須恵器　歪み大　内面黒斑あり　最大口径14.0　最小口径11.3
15	甕	(22.0)	(8.9)		AEG2	A	B	5	SF2	
16	甕	(16.0)	(6.1)		AG1	A	B	5	SF2	
17	甕	(21.4)	(6.5)		AGH1	A	C	5	SF2下層	外面黒斑あり　内面黒化
18	甕	(20.9)	(13.5)		EFGH5	A	B	20	SF2・3　SF3	内外面一部黒化
19	甕		(5.8)	(8.4)	AEG5	A	B	5	SF2・3	底面離れ砂
20	甕		(7.0)	(4.6)	AEG5	A	B	5	SF2　SF5	底面離れ砂
21	坏	12.0	4.0	5.1	AEG5	A	C	90	SF4	酸化炎焼成　内外面黒化
22	高台付坏		(5.6)	(6.7)	EG5	A	C	20	SF4	酸化炎焼成　内面黒化
23	高台付坏		(5.7)	6.8	AEGH5	A	E	100	SF4	須恵器　歪み大　最大口径13.4　最小口径12.0
24	台付甕		(3.7)	12.7	AEG5	A	B	15	SF2・4	内外面一部黒化
25	高台付坏	12.0	5.5	6.9	AEH5	A	E	50	SF5	須恵器　SF2下層　SF7下層
26	甕	(20.0)	(9.0)		AEG5	A	B	5	SF5	内面黒斑あり
27	甕	(21.0)	(11.8)		AEGH1	A	B	10	SF5	内面黒斑あり
28	高台付坏		(3.2)	(5.2)	DEGH5	A	C	30	SF6	酸化炎焼成　外面一部黒化
29	高台付坏		(3.8)	(6.6)	AEH5	A	E	20	SF6下層　SF9	須恵器
30	高台付坏	(11.9)	4.3	5.2	AEGH5	A	C	80	SF6	酸化炎焼成　内外面黒化
31	高台付坏	(12.3)	5.4	6.6	AEGH5	A	J	40	SF6下層	酸化炎焼成　外面一部黒化
32	高台付坏		(3.6)	(5.8)	AEH1	A	E	10	SF6	酸化炎焼成　外面一部黒化
33	甕	(19.8)	(4.8)		AEH5	A	F	5	SF6　SF3	須恵器
34	坏	(11.9)	4.6	(5.2)	AEG5	A	C	40	SF7	酸化炎焼成　外面黒化
35	高台付坏		(2.4)	(5.8)	AEG1	A	B	20	SF7	赤焼き　高台欠落　内外面黒斑あり
36	坏	(15.8)	(4.7)		AEG1	A	B	20	SF7下層	赤焼き　内外面黒化
37	高台付坏		(3.6)	(7.0)	ADEGH5	A	C	10	SF7	酸化炎焼成
38	甕	(11.0)	(5.9)		ADEG2	A	B	5	SF7	
39	坏	11.8	3.9	5.6	AEG5	A	B	70	SF9	赤焼き　内外面一部黒化　黒斑あり
40	坏		4.7	5.0	AEGH5	A	E	50	SF9	酸化炎焼成　内外看一部黒化　最大口径12.8　最小口径11.5
41	高台付坏	(10.8)	5.8	(6.4)	AEH5	A	G	30	SF9	須恵器　歪み大

を観察すると、練った粘土塊そのものという感じであり、外面は各面に対してやや斜めにヘラナデして調整しているように見え、天井部（あるいは底部）にあたる面はヘラケズリ後ナデであろう。

(3)　土壙（第31・32図）

折原石道遺跡の土壙は、第1・4号住居跡の東方に所在する12基とC区に散在する6基を除くと、土器焼成関連遺構の南側のB区の南端部に集中して分布している。出土遺物がごくわずかであるために、時期が決定しがたいものもあるが、少ない出土遺物と覆土の特徴から平安時代に属すると考えられる土壙を抽出すると25基を該当させることができる。平安時代の土壙であることが確実な土壙は、覆土に例外なく焼土・炭化物を多く含んでいるので、焼土・炭化物が多量に含まれる覆土が堆積したことによって埋没している土壙は平安時代に属するものと判断した。ただし、この中には、古代の遺物も中世の遺物も出土しているものがあ

第31図　土器焼成関連遺構出土遺物（3）



る。これは、土壙群分布域と重複して中世の柱穴群が分布するためであり、中世の建物が廃絶した後に中世遺物が混入したためと考えておきたい。

平安時代に属すると考えられる土壙は、特に集中する区域をもたず、東西２ｍ、南北２ｍの範囲の中に第18・19・20号土壙の３基がまとまるM－５グリッド内以外では、第７号土壙と大型の第25号土壙が重複するのを除けば、土壙間の距離は最低でも1.5ｍ以上、平均して３～５ｍ程度は離れているのが特徴である。後述する中・近世期の土壙の集中度とは対照的である。

第２号土壙

第２号土壙は、丘陵の麓に近いC区の東壁寄りに所在する。長径90cm、短径79cm、深さ５cmを測る、不整楕円形の小さな土壙である。主軸方向はN－８°－Wで、北に近い。壙底面は平らである。北壁に接して、長径33cm、深さ18cmのピット状掘り込みが重複している。主軸方向は出土遺物はないが、覆土に焼土・炭化材を含むため、平安時代のものと判断した。

第３号土壙

第３号土壙もC区に所在し、第２号土壙の西約3.5ｍの位置にある。長径2.53ｍ、短径1.3ｍ、深さ８cmを測る。南北に長い不整楕円形で少しくびれて西洋梨のような形態である。土壙の主軸方向はN－21.5°－Eで北北東である。壙底面は平らであるが、自然地形の傾斜に沿って北に傾斜している。覆土には焼土ブロック・炭化材が多量に含まれ、平安時代のものと判断した。

第７号土壙

第７号土壙は第12号土壙の南南東約4.5ｍの位置にあり、やや大きな第25号土壙と重複している。長径75cm、短径65cm、深さ18cmを測る、不整楕円形の土壙である。主軸方向はN－89°－Wで、ほぼ東西方向である。南側には径44cm、深さ３cmの浅い土壙状掘り込みが重複していた。覆土には大型ブロックも含めて焼土ブロックが多量に含まれていた。第25号土壙との新旧関係は第７号土壙の方が新しい。この土壙からは若干量の土師器甕片が出土しており、平安時代の土壙であることは確実と思われる。

第12号土壙

第12号土壙は第１号土器焼成遺構の南南東9.5ｍの位置にあり、南３ｍには第25号土壙、西南西２ｍには第13号土壙がある。長径1.22ｍ、短径85cm、深さ17cmを測る。主軸方向はN－19.5°－Wで、北北西である。わずかな歪みのある不整楕円形を呈する。棒状の片岩の礫２点が斜めに土壙北西部の壙底面に突き刺さるように立っていた。

土師器甕片や羽釜片が少量出土しており、これにより平安時代の土壙と考えた。覆土下層には焼土粒・焼土ブロックが多量であり、覆土の様相からは、土壙北西部のやや低くなった壙底部を少し埋めてから石を立て、その後何度も火を焚いた状況が想定される。ある

いは、この土壙においても土器を焼成していたかもしれない。

第13号土壙

第13号土壙は第12号土壙の西南西約2mに隣接して11°－Wで、北に近い。覆土に炭化物粒をやや多く含所在していた。不整円形を呈し、長径63cm、短径56cm、み、平安時代の土壙と考えることができる。深さ20cmを測る小型の土壙であった。主軸方向はN－

第14号土壙

第14号土壙は、第13号土壙の北西1.5m、第12号土壙の西北西3mの位置にあった。長径62cm、短径54cm、深さ35cmを測る不整楕円形の小型の土壙である。主軸方向はN－14°－Eで、北北東である。覆土の中位に焼土・炭化物をやや多量に含む。平安時代と考えることができよう。

第16号土壙

第16号土壙は、第1号土器焼成遺構の東南東約3.5mの位置にあり、最も近い土壙は第26号土壙で、東北東5.5mの位置に離れている。倒卵形の浅い土壙であって、長径88cm、短径70cm、深さ8cmを測る。主軸方向はN－22°－Wで北北西である。土壙の機能や性格には必ずしも関係がないかもしれないが、西壁に長径33cmのピット状掘り込みが重複しており、東壁には長径30cmの礫が乗っていた。覆土には焼土ブロック・炭化物が多量に含まれていた。平安時代の土壙であろう。

第17号土壙

第17号土壙は、第1号住居跡の南東11m、土器焼成関連遺構の北東端から東北東に7.5m離れた位置にある。最も近い土壙は第20号土壙で北北東2mの位置である。倒卵形を呈し、長径93cm、短径80cm、深さ29cmを測る。やや深めでボール状の掘り込みの壙底面の狭い土壙である。主軸方向はN－48.5°－Wで、北西である。やはり覆土中位に焼土ブロック・炭化物が多量に含まれていた。平安時代の土壙であろう。

第18号土壙

第18号土壙は第1号住居跡の東南東9.5mにあり、第19・20号土壙と3基でかたまって一群となっている。長径60cm、短径49cm、深さ15cmの不整楕円形を呈する小型の土壙である。主軸方向はN－82°－Wで東西方向に近い。覆土には焼土ブロック・炭化物が多く含まれる。平安時代の土壙であろう。

第19号土壙

第19号土壙は第18号土壙の東南東わずか20cmしか離れておらず、第20号土壙も南東30cmに隣接して所在する。長径63cm、短径58cm、深さ27cmを測る、不整円形の小型の土壙である。主軸方向はN－17.5°－Eで、北北東である。覆土には焼土ブロック・炭化物が多く含まれる。平安時代の土壙であろう。

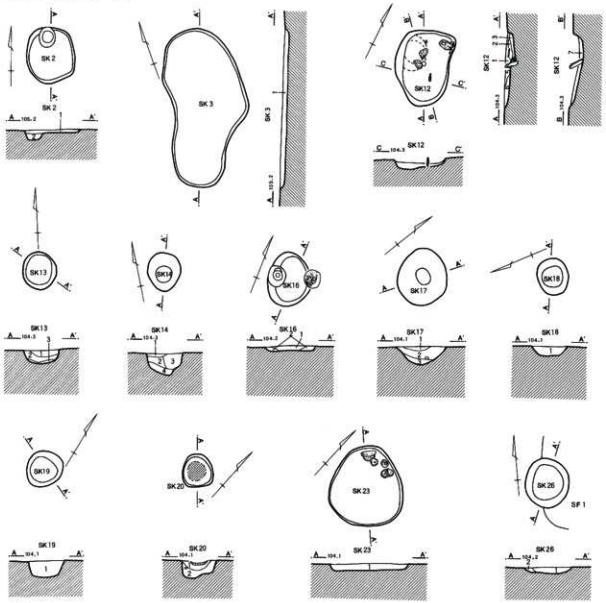
第20号土壙

第20号土壙は第1号住居跡の東南東11mの位置にある。近接する土壙との距離は前述のとおりである。長径53cm、短径50cm、深さ30cmを測る、不整楕円形の小型の土壙である。主軸方向はN－50°－Wで、北西である。覆土上層には焼土ブロックが多量に含まれる。土壙が埋まりきった後に、長径32cm、短径30cm、深さ5cmの不整円形の皿状の浅い掘り込みが掘られていた。この掘り込みの底面全体が被熱している状況が認められた。平安時代の土壙であろう。

第23号土壙

第23号土壙は第1号住居跡の東約2mの位置に所在する。第1号住居跡カマドAの煙道先端からならば東約1.5mの位置にあたる。長径1.3m、短径1.2m、深さ10cmを測る、不整楕円形の土壙である。主軸方向はN

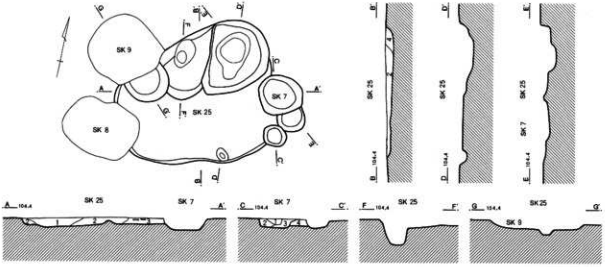
第32図　古代土壙（1）

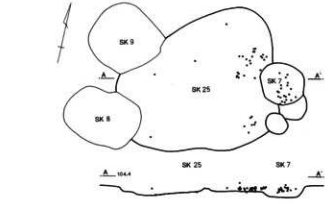


SK2
1　10YR　4/4　褐色　焼土粒少量含む。上層に炭化材混入。
2　10YR　5/4　にぶい黄褐色　焼土粒少量含む。
SK3
1　10YR　4/4　焼土ブロック・炭化材やや多量に含む。
SK12
1　10YR　4/3　にぶい黄褐色　焼土ブロック・小礫やや多く含む。
2　10YR　4/6　褐色　焼土を層状に含む。
3　10YR　5/3　にぶい黄褐色　粘質。被熱のためジャリジャリする。
4　10YR　2/3　黒褐色　被熱のためジャリジャリする。
5　10YR　5/3　にぶい黄褐色　焼土粒少量。小礫やや多く含む。
6　10YR　5/2　灰黄褐色　小礫を含まない。
7　10YR　4/6　褐色　焼土粒・炭化物粒・小礫少量含む。
SK13
1　10YR　3/3　暗褐色　小礫やや多く含む。
2　10YR　2/3　黒褐色　炭化物粒やや多く含む。
3　10YR　3/3　暗褐色　粘質。
SK14
1　10YR　4/3　にぶい黄褐色　小礫少量含む。
2　10YR　3/2　黒褐色　炭化物粒やや多く、焼土粒少量含む。
　　暗赤粘質土を島状に少量含む。
3　10YR　3/3　暗褐色　炭化物粒・焼土粒やや多く含む。
4　10YR　3/3　暗褐色　粘質。
SK16
1　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
2　10YR　4/4　褐色　焼土粒少量含む。
SK17
1　10YR　4/2　灰黄褐色　焼土粒・炭化物粒少量含む。
2　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック・ロームブロック多量に含む。
3　10YR　3/3　暗褐色　ロームブロック多量、焼土粒・炭化物粒少量含む。
SK18・19
1　10YR　3/2　黒褐色　焼土ブロック・ロームブロック・焼土粒・炭化物粒
　　多量に含む。
SK20
1　10YR　3/4　暗褐色　焼土ブロック多量、炭化物粒少量含む。
2　10YR　3/3　暗褐色　焼土ブロック・ロームブロック・炭化物粒少量含む。
SK23
1　10YR　3/3　暗褐色　炭化物粒・小礫やや多く含む。
SK26
1　10YR　3/3　暗褐色　焼土粒やや多く含む。
2　10YR　4/6　褐色　粘質。

0　2m

第33図　古代土壙（2）



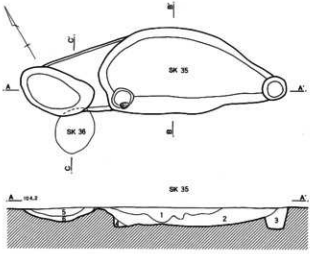


SK7

1　10YR　3/3　暗褐色　地土ブロック多量に含む。
2　10YR　2/2　黒褐色　地土ブロック多量に含む。
3　10YR　3/4　暗褐色　地土の大形ブロックを含む。
4　10YR　4/4　褐色　地土粒少量含む。

SK25

1　10YR　4/4　褐色　小礫多量に含む。
2　10YR　3/2　黒褐色　炭化物粒・小礫少量含む。
3　10YR　4/6　褐色　地土粒・炭化物粒・小礫少量含む。
4　10YR　3/3　暗褐色　炭化物粒やや多く含む。



SK35

1　10YR　3/3　暗褐色　地土ブロック多量、炭化物粒少量含む。
2　10YR　3/2　黒褐色　地土粒・炭化物粒多量に含む。
3　10YR　3/4　暗褐色　砂質。地土粒・炭化物粒やや多く含む。
4　10YR　4/6　褐色　粘質。
5　10YR　4/3　にぶい黄褐色　上層に地土ブロック多量、下層に炭化物粒やや多く含む。
6　10YR　5/3　にぶい黄褐色　地土粒・炭化物粒少量含む。

0　2m

−42.5°−Wで、北西である。壙底面は平らであるが、わずかに北に傾斜している。北壁際から東壁際にかけての底面上には片岩の礫が6点並んでいたが、礫の形態や大きさ・配列状態等には特別な規則性はなく、意図的に置かれた状態とは言えず、流れ込みと考えておきたい。覆土に炭化物粒をやや多く含む。平安時代のものと判断した。

第25号土壙

第25号土壙は第12号土壙の南3ｍの地点にあり、東端に第7号土壙、北西端から西端にかけて第8・9号土壙と重複している。長径約2.6ｍ、短径2.13ｍ、深さ15cmを測る、不整楕円形のやや大きな土壙である。主軸方向はN−59°−Wで、西北西に近い。壙底面は平らに近いが、やや浅い部分、やや深い部分があるというような、大きなうねりのような緩い凹凸がある。3基の土壙に切られている他に、北壁側には3つの土壙状掘り込みと1つのピット状掘り込み、南壁側に2つのピット状掘り込みが重複している。北壁側の土壙状掘り込みは東から長径1.34ｍ、深さ23cmの不整楕円形で2段掘り込みのもの、径約1ｍ、深さ13cmの不整半円形のもの、長径73cm、深さ16cmの不整円形のもの、ピット状掘り込みは長径48cm、深さ40cmの不整楕円形のもの、南壁側のピット状掘り込みは東から長径40cm、深さ13cmのもの、長径24cm、深さ13cmのものであった。いずれの土壙・土壙状掘り込み・ピット状掘り込みも第25号土壙本体よりは新しい時期に掘り込まれたと思われる。第8・9号土壙の2基は中世以降に下ると考えられ、その他の掘り込みも新しいであろうが、第25号土壙本体と第7号土壙からは若干量の土器片が出土しており、土師器甕は接合するものがある。このため、前述のように、25→7という新旧関係ではあるが、時間差はあまり大きくないと考えられる。この土壙も遺物の時期から平安時代と判断される。

第26号土壙

第26号土壙は第1号住居跡の南約11ｍ、第16号土壙の西北西5.5ｍ、第35号土壙の北東約3.5ｍの位置にあり、土器焼成関連遺構の第1号土器焼成遺構拡張部分の掘り込みと重複している。長径80cm、短径72cm、深さ10cmの不整楕円形の土壙であり、浅い皿状の掘り込みとなっていた。主軸方向はN−7°−Wで、北に近い。覆土には焼土粒がやや多く含まれていた。この覆土の状況から平安時代と判断した。

第35号土壙

第35号土壙は第1号住居跡の南南西約15ｍ、第14号土壙の北西5ｍの位置にある。この土壙は2つの土壙が連結したような形態になっており、三日月形に近い不整楕円形を呈している。全体規模では、長径4.3ｍ、短径1.33ｍ、深さ33cmを測り、主軸方向はN−58°−Wで、北西よりやや西寄りである。2つの土壙に分解すると、東土壙は長径3.05ｍ、短径1.33ｍ、深さ33cm、主軸方向N−54°−Wの西北西となる不整楕円形であり、西土壙は長径1.23ｍ、短径67cm、深さ23cm、主軸方向N−45°−Wの北西となる不整楕円形である。

2つの土壙の中間に幅0.9〜1.3ｍ、深さ7〜12cmの浅い掘り込みが連結部となっており、これも土壙であるとすると、西土壙の南壁に重複している中世以降の第36号土壙を加えて4基の土壙の重複となる。また東土壙には東端部に長径40cm、深さ36cm、南壁西端部に長径36cm、深さ40cmのピット状掘り込みがそれぞれ重複している。南壁西端部のピット状掘り込みには長さ16cm程度の礫が入っていた。

東土壙・西土壙ともに覆土には焼土ブロック・炭化物が多量に含まれており、第35号土壙全体としても平安時代の土壙と考えることができる。

土壙出土遺物（第33図）

土壙出土の土器類は決して多くはなく、土壙の時期判定に利用することができたのは、わずかに第12号土